

## 「虐殺」の物語の奥行き

——シャリーフ・カナアナ、ニハード・ザイターウィー著  
『デイル・ヤーシーン』（破壊されたパレスチナ村落シリーズ  
No.4）の解題と翻訳——

金城 美幸

### 1. 訳者解題

1948年、イスラエル建国に伴って故郷を追われたパレスチナ難民たちは、その後離散状態にあっても破壊された故郷についての口述語りを数多く残してきた。ここに訳出するのはパレスチナに存在したデイル・ヤーシーン村（Dayr Yāsīn）についての口述語りの記録である<sup>(1)</sup>。これはパレスチナのヨルダン川西岸地区中部のビルゼイト大学で1986年～98年まで実施された「破壊されたパレスチナ村落記録プロジェクト Mashru' Tawthīq al-Qurā al-Filasṭīniya al-Mudammara」（以下、「村落記録プロジェクト」）より出版されたモノグラフ・シリーズ第4冊目である。同モノグラフ・シリーズは、破壊以前の村落の経済・社会・政治構造が、20世紀初頭以降の激動の時代（オスマン帝国の統治、イギリス委任統治、ユダヤ人入植地の登場）にいかに関与・変容されたかを村民たちの視点から記録している。プロジェクトが実質的に終了した1998年まで22村の記録が出版された<sup>(2)</sup>。

## 1-1. パレスチナ／イスラエルにおける歴史認識論争と口述証言の位置づけ

1948年、住民の大多数がアラブ系であるパレスチナにユダヤ人国家イスラエルが建国された。結果、先住者パレスチナ・アラブ人約75万人が難民となり、破壊されたパレスチナ・アラブ人村落数は、377村～530村の規模で見積もられている<sup>(3)</sup>。パレスチナ・アラブ人たちはこの故郷喪失・追放・離散の経験を「ナクバ（大災厄）」と呼び、支配者となったイスラエルの発信する語りに挑戦してきた。

「パレスチナ人」という集合アイデンティティは、オスマン帝国崩壊後の英委任統治下パレスチナにおいて名望家主導の民族運動の中で萌芽を見せたが、ナクバによって一度潰えてしまった。1960年代以降、離散者たちは「パレスチナ人」という集合的アイデンティティを再度立ちあげ、離散社会に定着させたが、イスラエルの支配的な歴史語りの前にパレスチナ人の歴史記述は顧みられることは少なかった。ましてや、本稿が焦点とする難民の口述語りは——歴史学一般において依然そうであるように——史料として参照されること自体、極めて限定的だった<sup>(4)</sup>。

むしろ、イスラエルの歴史研究ではその後、公文書に基づく歴史記述という「素朴実証主義」とも言える機運が高まる。これは1970年代後半、イスラエルの他英国・米国・国連が、それぞれの規定に則って1948年当時の史料を公開したためである。それゆえ、イスラエル国内でも従来の国史に挑戦する若い世代の「新しい歴史家」たちが現れ、パレスチナ・アラブ人の難民化にはシオニスト側の軍隊の暴力行為が関わっていた点を明らかにした。

「新しい歴史家」のうち、パレスチナ難民の発生原因をめぐる議論を牽引した人物がベニー・モリスである。彼は著書『パレスチナ難民問題の誕生』（1987

年、以下『誕生』)<sup>(5)</sup>で、イスラエル〈建国〉の側面よりもパレスチナ村落の〈破壊〉の側面に注目し、各村落が破壊された過程を詳述した。

しかし、シオニスト民兵および国防軍による村落破壊・住民追放についてのモリスの結論は、パレスチナ人研究者の厳しい批判を呼び寄せた。すなわち、①パレスチナ人の追放はシオニスト指導部の政治決定ではなく、現場軍人らの個別的判断だったこと、②追放はアラブ人とユダヤ人の「戦争」の副産物であり、イスラエル国家の存亡を賭けたやむを得ない戦争の結果だという結論であり、結果モリスはパレスチナ難民の発生に関するイスラエルの国家責任を免じる立場を取った。筆者も、専ら公文書に基づく歴史家モリスが、公文書が全て公開された訳ではない点を承知しながら上記の結論を下す論理矛盾を指摘してきた<sup>(6)</sup>。

その後のモリスは、より詳細な記述を提示し続けることでパレスチナ人たちの批判を跳ね返し、自身の語りを定着させようと努めてきた。実際、2004年に出版された『誕生 改訂版』は、初版に比べより詳細な情報が挿入された分厚い記述に生まれ変わった<sup>(7)</sup>。この公文書という原則的には開かれた史料（公開請求後の可否判断に透明性がないという実際上の問題は置いておく）に基づき、生まれ変わるたびにより詳細かつ網羅的になるナラティヴの前にすれば、パレスチナ難民の口述証言の地位は非常に弱い。

## 1 - 2. ナクバの記憶継承の試み

ナクバから約70年が経とうとする現在、直接の体験者の多くは失われた。ここで訳出するテキストも約30年前に記録された口述語りであり、既に歴史的文書として扱うべきかもしれない。だが、体験者の記憶が消え去ってしまう事態を恐れ、彼らの記憶を救い上げ、繋ぎ止める試みが数々存在する。

その1つは、血縁・地縁ネットワークに基づいて故郷の村落誌を書く試みで

あり、本稿で取り上げる「村落記録プロジェクト」もこれに含まれる。各地の離散パレスチナ人コミュニティで村落誌を収集するアメリカ人類学者ロシヤル・デーヴィスによれば、これら村落誌が書かれ始めたのは1980年代後半、レバノン戦争（1982年）時のPLOのベイルート撤退以降、離散コミュニティにおける政治的動員が弱まった時期だった。つまり、これらの村落誌にはパレスチナ革命の挫折感の中で政治的代表によらずに難民自らが来歴を語り始めたという営為が見出せるのである<sup>(8)</sup>。デーヴィスは、80年代後半ばに出版が始まったビルゼイト大学「村落記録プロジェクト」が、その後の村落誌出版の起爆剤になったとする。

ナクバの記憶の継承作業としてもう1つ言及しておくべきは、ウェブ空間でのナクバ証言集積である。最大のものは1999年に北米在住のパレスチナ人主導で作られたウェブサイト「記憶されるパレスチナ Palestine Remembered」であり、2016年9月段階で317村について621本のインタビュー（2837時間分）が収められ、今後も数を伸ばす見込みである<sup>(9)</sup>。また、2002年にレバノンのパレスチナ人を中心に立ち上げられた「ナクバ・アーカイヴ Nakba Archive」はレバノンの全難民キャンプでの証言を集めている<sup>(10)</sup>。さらに2008年にはビルゼイト大学内で「村落記録プロジェクト」を引き継ぐべく「パレスチナ・アーカイヴ・プロジェクト（PAP）」が発足し、そのウェブサイトでは難民らの語りの音声・動画記録も公開され、本稿の訳文の基データである証言動画も参照できる<sup>(11)</sup>。インターネットの活用により証言が発信される環境が変化したことで、村落誌の出版は今後も増加すると予想される。この状況の中では、村民たちの歴史語りの検討は今後も重要性を増すだろう。

### 1-3. ナクバの語りにおけるデイル・ヤーシーン村

本稿で取り上げるデイル・ヤーシーン村の歴史は、常にある言葉と対になっ

て語られてきた。その言葉は「虐殺」である。1948年4月9日、この村を「イルグン」<sup>(12)</sup>と「レヒ」<sup>(13)</sup>の2つのシオニスト修正主義政党系民兵組織が襲撃し、パレスチナ・アラブ住民らを惨殺した。約250人が犠牲となったとした当初の報道は、パレスチナ全域に大きな衝撃を与え、その後の住民退去の引き金になった。

この虐殺の凄惨さゆえ、パレスチナ人にとってデイル・ヤーシーン村は、シオニスト軍の残虐性を示すナクバの〈象徴〉となり、同時にその後も続くナクバの〈起源〉となった。とは言え、ナクバで虐殺が起こったのは実はデイル・ヤーシーン村だけではない。「村落記録プロジェクト」編集者の1人サーリフ・アブドゥルジャワードは、村落誌の調査を通して当時約70村で虐殺が起きたと推計し、デイル・ヤーシーン事件を例外化する論調に異議を唱える<sup>(14)</sup>。ではなぜ、数ある虐殺の中でもデイル・ヤーシーン事件は大きな注目を集めてきたか。この問いには以下の3つの理由がある。

#### ① 追放計画の最初の標的としてのエルサレム

1947年2月、英委任統治政府がパレスチナ撤退の意向を表明すると、シオニスト指導部と当時のヨルダン国王アブドゥッラー1世の間でパレスチナ分割をめぐる密約が交わされたが、エルサレムについては両者間での明確な合意はなかった。結果、同年11月の国連分割決議以降、エルサレムではユダヤ人とアラブ人との衝突が頻発し、テルアビブとエルサレムを結ぶ幹線道路では絶え間ない襲撃が起こった。このため、エルサレムのユダヤ人入植地（シオニズム運動以前よりエルサレム旧市街に存在した正統派および東洋系ユダヤ教徒コミュニティ（旧イシューヴ）含む）は、パレスチナのシオニスト社会（イシューヴ）の機能的中心であるテルアビブから一時分断され、孤立した。

エルサレムのユダヤ人入植地の孤立と各地での衝突を前に、1948年3月、シオニスト指導部は打開策として「ダレット計画」を策定した。このダレット

計画については、1960年代よりパレスチナ人歴史家ワリード・ハーリディーがパレスチナ・アラブ人追放のマスター・プランだとして取り上げてきた。ハーリディーによれば、同計画の目的は「ジャッファ・エルサレム間の道路沿いのアラブ人村の占領と浄化であり、それにより沿岸部からエルサレムへのユダヤ軍の進軍を確実にし、同時に国連分割決議でパレスチナ人に割り当てられた国家の中心部を分割すること」だった<sup>(15)</sup>。4月1日、ダレット計画に基づきデイル・ヤーシーン村の位置するエルサレムでは「ナフション作戦」が始まり、同じ道路沿いに位置したカスタル村とカルニヤ村が陥落した（4月3日）。特にカスタル村では、パレスチナ・アラブ人民族運動の指導者ハーッジ・アミン・アルフサイニー<sup>(16)</sup>の甥アブドゥルカーディルが地元志願兵部隊「聖戦隊 Jaysh al-Jihād al-Muqaddas」を率いてユダヤ軍との熾烈な戦いを繰り広げ、「殉教」した（4月6日）。

## ②中央政治諸機関との関係

村は委任統治政府や国際機関の本部が集中するエルサレムに近く、虐殺直後より村では国際機関の立ち入り調査が行われ、状況が直ちに発信された。例えば、事件の2日後に村に入った国際赤十字パレスチナ派遣団長ジャック・ド・レニエの報告書は、当時の英米メディアで大きく取り上げられた<sup>(17)</sup>。また、英委任統治政府が招集した軍事委員会議事録、生還者の保護にあたったアラブ高等委員会関係者の手記も残っている。さらに、エルサレム名望家フサイニー家出身の女性ヒンド・アル＝フサイニー（Hind al-Ḥusaynī）が孤児らを引き取り、彼らのために小学校「アラブの子供たちの家（Dār al-Ṭifl al-ʿArabī）」を設立するなど、生還者を対象とした社会活動も行われた。

## ③イシューヴ内での権力闘争

他方、襲撃者であるシオニスト民兵組織の側も、村の陥落・住民惨殺を「手

柄」として国内外に発信した。事件当日、捕虜とした老人・子供・女性らをアラブ軍の勢力圏に追い出す前に、彼らを伴ってユダヤ人入植地を巡回して「勝利の行進」を行うなど、「功績」をイシューヴに向けて誇示した。同日夜8時には国際メディアに向けた記者会見も行き、約240人のアラブ人を殺害したと大々的に発表した。

襲撃者自身が虐殺を喧伝した理由は、彼らがイシューヴ内で主流派を成していた労働シオニストとは敵対関係にあった修正主義政党系の民兵組織だった点に起因する。建国を目前に控えた時期、修正主義政党には自分たちの軍事的功績を強調することで労働シオニスト指導部やイシューヴ戦闘員・住民に影響を及ぼしたいという意図があった。

これに対して、主流派労働シオニスト指導者らのその後の行動は、結果的にデイル・ヤーシーン事件の特殊性を際立たせることになった。つまり、1948年の追放について一貫して責任を否認するイスラエルで、この事件は唯一明確に断罪される出来事となった。例えば、事件の2日後、イシューヴの実質的指導部であるユダヤ機関は、イルゲンとレヒの行為に対し以下の非難声明を出した。「ユダヤ機関は反乱分子らによるデイル・ヤーシーン村の占領についての詳細を受け取った。ユダヤ機関はこの蛮行に衝撃と嫌悪を表明する。この作戦は本質的にイシューヴの精神と、(中略)ユダヤ機関が留保なく受諾したジュネーヴ会議の規則に反する。」<sup>(18)</sup>ユダヤ機関は「反乱分子」の蛮行を断罪し、シオニスト主流派の精神を穢れ無きものとして確保しようとしたのである。

これはイシューヴ指導者ベングリオンのアラブ側に対する謝罪にもつながり、1948年にシオニスト側が働いた暴力行為の中で唯一の公式謝罪となった。ベングリオンは、先の声明の翌日、ユダヤ機関特使をヨルダン国王の許に送り、事件への謝罪を行うと共に自らの責任を否定し、襲撃者を非難した<sup>(19)</sup>。もちろん、これには建国直前の時期に国際社会からの断罪を恐れたことと、ヨルダンの報復攻撃を回避したいという政治的思惑が働いていた。

修正主義政党の「暴力性」の強調、自らの部隊の「倫理性」の強調、デイル・ヤーシーン事件の「例外化」——これが以降の労働シオニストたちの歴史観の基本路線となり、デイル・ヤーシーン事件はイスラエルの言論空間でも数多く言及されてきた。二大勢力の対抗関係の中、デイル・ヤーシーン村民の犠牲者の規模は長らく250人程度に見積もられてきた。だが、訳出するテキストではこの見積もりが過剰である点が指摘されている。村民らの聞き取りで名前が挙がった犠牲者を数え上げると総計は107人であり、零れ落ちた死者の可能性を勘案しても最終的な犠牲者数は120人以下だと著者らは結論づけている。

#### 1-4. デイル・ヤーシーン事件についての修正主義的歴史観

しかし近年、イスラエルでは旧来の労働党からの糾弾を覆し、建国史における修正主義運動の「功績」を再評価する動きもある。その先鋒イスラエル人軍事史家ウリ・ミルシュテインは、著書『デイル・ヤーシーンにおける血の中傷』<sup>(20)</sup>でデイル・ヤーシーン事件は「虐殺」事件ではなかったとの持論を展開する。ミルシュテインが「虐殺」を否定する論拠は以下の2つである。

- ①「戦士」としての村民像——デイル・ヤーシーン村の村民の多くは武装しており、彼らが死亡したのは戦闘に参加したためだった。周辺の村同様、村民らは武器庫を持ち、村には近隣諸国からのアラブ軍基地もあった。
- ②ハガナーとの協力——デイル・ヤーシーン村への攻撃はナフシオン作戦の一部であり、作戦は労働シオニストの軍事組織ハガナー本部との協調の下で実施され、ハガナー突撃部隊パルマッハは実際の占領作戦にも参加した。

ミルシュテインは、このように対アラブ人と対労働シオニスト（ハガナー）という2つの関係史の「修正」に照らしてデイル・ヤーシーン事件は「虐殺」



事件ではなかったと主張する一方、1948年に「実際に起こった虐殺」として以下の2つの事件を挙げる。1つ目は、アラブ人の手による「虐殺」、すなわちアラブ人戦闘員らがデイル・ヤーシーン事件の報復として、エルサレム旧市街北東スコープス山に位置する病院ハダサーとヘブライ大学に向かう護送列車を攻撃し、乗員78名を殺害した事件である。2つ目は、ハガナーが行った「虐殺」、すなわち1948年5月1日、ハガナー突撃部隊パルマッハがパレスチナ北部サファド近郊のアイン・ザイトゥーン村で、非武装の村民の包囲攻撃と捕虜惨殺を行った事件である。

この歴史観は修正主義系の軍人たちの間で一定の受容を見せ、従来の労働シオニストの公式の語りとの間に緊張関係を見せている。2002年には、イスラエル軍の兵士訓練課程の教育セミナーでデイル・ヤーシーン村での「虐殺」を否定する講義を行った退役軍人に、軍当局が講義停止を言い渡す事態にも発展した。

## 1-5. 村民の語りの中のデイル・ヤーシーン村

デイル・ヤーシーン事件について、イスラエルの労働シオニスト、修正主義シオニスト、パレスチナ人の中での交錯した歴史観を紹介したが、これらは対等な対立関係にあるのではない。イスラエル国内での歴史観の対立は、あくまでもイスラエル国家が保証するアーカイヴや大学などの歴史的知を生み出す制度に支えられている。対して、国家設立の条件を奪われたままのパレスチナ人の学術研究では、「自民族」の「民族自決権」を主張するというナショナリスト的戦略に立ってナクバの被害を強調し、対抗してきた。

だが、以下に訳出した村民らの語りが見せているのは、ナクバや虐殺に集約されるナショナルな物語からは零れ落ちてきたデイル・ヤーシーン村の姿である。「虐殺」が強調される時、行為主体や殺害行為の凄惨さ、犠牲者数に焦点

が当てられがちだが、「虐殺」によって抹殺されたのは物理的な人間存在だけではない。デイル・ヤーシーン村という場所に生じた社会・経済構造、彼らの時空間意識（歴史意識）もまた抹殺された。ここに訳出したテキストは、村民の「虐殺」と共に消された村落の生きた姿を示す貴重な史料である。

ここで村民たちの語りから明らかになる事柄について次の2点から考えてみたい。第一に、村民の語りが従来の「実証的」知識——パレスチナ／イスラエル地域研究の現状ではその多くはイスラエルや欧米の国家史料に依拠している——に投げかける新たな論点についてである。村民の語りからは、デイル・ヤーシーン村に固有の社会・経済構造や周辺入植地との関係が読み取れる。そのいくつかを紹介しよう。

村内の社会関係の特徴として著者たちが挙げるのは、「結束」と「協力」という点である（本稿168（309）頁）。村内は「ハムーラ」ごとに組織され、シャハーダ、ハミーダ、ジャーバル、アカル、ジュンディーの5つのハムーラがあった。「ハムーラ」は、しばしば「父系集団 patrilineage group」「氏族 clan」とも訳されるが、特にパレスチナ／イスラエル地域研究では多分に論争的な概念でもある。「ハムーラ」を巡る論争は1960年代、イスラエル人人類学者がイスラエル領に残ったパレスチナ・アラブ人村落に関して体系的研究を発表し始めた時期に遡る。特にイラク出身のイスラエル人人類学者アブネル・コーヘンは、村落の基礎単位としての「ハムーラ」概念を提示し、「ハムーラ」という「伝統的」社会構造がアラブ社会の「後進性」の要因だと説明した。これに異議を唱えるタラール・アサドは、イスラエル人人類学者にとっての「ハムーラ」は、「シオニズム〔の抱える〕問題にとってのイデオロギー的解決」を提供する概念として操作されている点を批判した。つまりアサドによれば、コーヘンはアラブ村落社会の「伝統」の象徴として「ハムーラ」の役割を固定的に捉えたために、イスラエルにおけるアラブ人とユダヤ人との社会的ギャップの要因をアラブ社会内部の「後進性」に求め、イスラエルの政策的問題を看過するという

イデオロギーの問題を抱えていたのである<sup>(21)</sup>。

ただしアサドも認める通り、シオニズムのイデオロギーにおいて「ハムーラ」が概念装置として一定の機能を担っている事実はあるとしても、村民らの生きた経験の中で知覚される社会組織としての「ハムーラ」はまた別に存在する。そして、そうした「ハムーラ」は村民らにとっては村の基礎単位として、かつての安定的な生活を保証する枠組みとして、郷愁をもって語られる<sup>(22)</sup>。

経済面では、20世紀初めまで村民らは専ら農業を生計手段としていたが、イギリス委任統治の始まり（1918年）はその経済構造に大きな変更を迫った。村の地盤には建築材に適した岩石が眠っており、公共事業や入植地建設の「経済的恩恵」を受ける形で採石業が発展した。結果、多くの農民たちが自作農から建設・製造業労働者に転身した。また、村はユダヤ人入植地で取り囲まれ<sup>(23)</sup>、入植地との関わりは必然的なものだった。農産品を入植地に売りに行くのは女性であり、入植地からは村に建築資材を購入しに来ていた。

土地統計を見ると、村の総面積 2857 ドウナムのうち、アラブ人が 2701 ドウナムを所有し、3 ドウナムは公有地で、残りの 153 ドウナムはユダヤ人が所有していた。ナショナルな紛争構造の理解に照らせば、153 ドウナムは村内の「裏切り者」がユダヤ人に土地を売ったと理解される事態だが、村民らによれば事実はむしろ「逆」らしい。

ある時、1人のユダヤ人がやって来た。奴はザイダーンの家のある者の土地の中に土地を持っていた。そして、建物を建てるために地図を作ろうとしていた。ザイダーンの家のある者は自分の土地のうちの 20 平方メートルの土地を売ろうとしたが、そこには条件があった。奴が自分の土地から 2 分の 1 ドウナム〔約 500 平方メートル〕を渡すという条件だった。奴の方もこれに納得したからザイダーンの家のある者は奴に土地を売ったんだ。（本稿 142（335）頁）

村民にとっては村の土地の一部をユダヤ人に売ったとしても、同じユダヤ人からそれ以上の土地を買ったのだから「村の土地がユダヤ人側に流れ出すことはなかった」。ナショナルな観点からすれば「アラブ人」の土地が「ユダヤ人」に渡った時点で裏切り者の烙印が押されるが、村民の感覚から言えば村の土地がユダヤ人との売買交渉で納得のいく形で交換されていた。ナショナルな観点からだけでは断定的評価を下せない現実の重層性を窺い知ることができる。

村民らの語りから明らかになる事柄の2つ目は、村民たちが抱く時空間意識とナショナルな歴史意識の間のギャップである。ナショナルな歴史意識は均質な時空間理解に基づいている。曰く、シオニストの入植以前のパレスチナは「アラブ人」によって住まわれ、シオニストの入植により「ユダヤ化」が始まった、と。つまりナショナルな歴史意識によれば、イスラエルの建国とは、シオニストの言説戦略の中で構築された「実証的知識」による真／偽の二分法的思考に立ち、様々な概念装置やイデオロギー装置を駆使して作り上げた「真」たるシオニスト的歴史観でもって時空間を塗り替えてゆく過程であった。

他方、村民の語りはこれとは対照的な時空間意識に基づいている。例えば「デイル・ヤーシーン」という村名について考えてみよう。「デイル」とは「修道院」、すなわちキリスト教に関係する言葉であり、「ヤーシーン」はかつて村に住んでいたシェイフの名前であり、クルアーンの「ヤー・シーン（スイーン）」章に由来するイスラームの色合いの濃い人名である。つまり「デイル・ヤーシーン」という村名それ自体に、キリスト教とイスラームの共存の歴史が刻まれている。ただし村民たちが暮らした当時のデイル・ヤーシーン村には既にクリスチャン住民はいない。しかし、それにもかかわらず共存の歴史が刻まれた村名が維持されているという事実、宗教間共存を歴史の遺産の一部として生きてきた村民らの姿を見出せる。

この空間意識の重層性は、村の至る所に悪霊（jinn）が住んでいたという「事

実」(敢えて「事実」と述べる)によって厚みを増す。村民らは遺跡やモスクや洞窟に棲む悪霊という超越的存在を認め、様々な怪談を語る。肝試しに悪霊に挑戦した村民はついに命を落としてしまった。超越的な存在は確かに生活の一部であり、村の景観の一部だった。

様々な存在・集団の暮らす村では移り変わる支配者たちについての歴史語りも実にユニークである。「トルコ人たち」、「イギリス人たち」、「ユダヤ人たち」、村には実に様々な支配者がやって来た。支配者による圧政はいつの時代も苦しく、「トルコ時代」に村にやって来た軍人らによるひどい仕打ちは枚挙にいとまがない。だが、村民らがはっきり述べるのは、イギリス人とユダヤ人に比べ唯一「トルコ」だけが「統治 hukm」と呼びうるものを維持して村民の暮らしを守っていた点である。

トルコ時代にあった統治 (hukm) の後はもう統治と呼べるものは無くなってしまったよ。昔はどこへ行くにも身分証もパスポートもいらなかった。ラマダーン中、断食しない奴がいればラマダーン明けの祭りの後に30日間キシラ〔エルサレム旧市街内の刑務所〕に放り込まれた。ラマダーン中はエルサレムの巡回があって、1つの食堂も開けさせなかったし、私たちの子供を惨たらしく殺すことも、私たちが家から追い出すことも、私たちの土地を取ることもなかったんだ。(本稿142(335)頁)

「トルコ時代」、たとえ軍人からの嫌がらせが日常的にあったとしても、村民らが重視しているのはラマダーン月の慣習が維持され、その期間は家族の生命・暮らしの空間・財産が保証された点である。ここではイスラーム的慣習の保護が安全を守る仕組みと理解され、「統治」と認められている。他方、「大革命」(1936年～39年)<sup>(24)</sup>時の委任統治政府による弾圧や、その後のシオニストによる虐殺と追い立ては、村民たちには頼みの綱となる秩序もなく剥き出しの

「個人」として当局と対峙する他なく、すべからく潜在的な敵と見なされる状況の中で攻撃から逃れる手立ても失われた。

ただし、村民たちの重層的意識の中では、統治を崩壊させた支配者たちの行いも歴史の層の1つとして含み込まれている。現代社会において「理解しやすい」ナショナルな物語を支える「歴史的」・「実証的」な知では、真偽の峻別を目的とし、一連の実証手続きを経て「真」として確定可能なものは維持・強化される一方、「偽」とされる事柄は一切切り捨てられる。ナショナルな物語は、アラブ農村の「慣習的知」は「不合理」かつ「後進的」だとして切り捨てるか、あるいは良くて「文化の尊重」という題目で飼い馴らす対象とするしかなく、ナショナルな物語の構築・発信に成功したイスラエルは、村民の「慣習的知」を、ごく一部を除いて土地ごと抹殺してきた。しかし、村民らの「慣習的」「生きられた」知の側も、支配者らの悪行を、言わば善悪のグラデーションによって構成される歴史観の中に包み込み、圧政を飼い馴らす「知」を生み出していると見ることができる。つまり、現在の圧政がいかに苦しくとも、その支配は村という場に生起した多様な存在とそれが織りなしてきた歴史の地層のわずか一層でしかない。そのような形で支配者の存在を歴史の層の一つとして持ち堪え、重層的な歴史の宿る土地の継承者・実践者として支配者に対峙しているのである。これが、土地に対する「主（あるじ）」たる意識を担保する歴史意識ではないか。

このような重層的な歴史意識は、ナショナルな物語を支える歴史意識と対照を成すだけでなく、ナショナルな歴史への「抵抗」という構図をも超越している。つまり村民らの歴史意識は、支配者が既存の統治形式を破壊しながら空間を均質化するのに対して、また別の均質空間を創出することで対抗するのではない。村民たちは独特の「歴史哲学」を実践することによって、この均質化が生み出す排除の圧力を持ち堪え、超越する精神を培っているのである。

村が物理的に破壊され、村の慣習的知の直接の継承者たちが少なくなった現

在、失われつつあるパレスチナ・アラブ人の民衆文化を改めて捉えなおす意味は、ここにある。そしてこれを現代も続くパレスチナ人の「スムード」（留まること、持ち堪えること）の抵抗論理を可能たらしめる意識の一側面として考察し、今日的抵抗と接続させることも可能だろう。

## 2. 翻訳 『デイル・ヤーシーン』

### \* 謝辞

翻訳を快諾してくれたシャリーフ・カナアナ氏には記して深謝する。口語表現の読解・発音を指導してくれたアル＝クドゥス大学教授シュクリー・アル＝アブド氏、翻訳草稿にコメントをくれた日本学術振興会特別研究員の鈴木啓之氏にも謝意を表する。ただし、有りうる誤記・誤訳の責めは訳者にあるのは言うまでもない。また、本研究は科研費（15J40099）の助成を受けた。

### \* 凡例

- ・本文は、著者たちによる描写文はフスハー（正則アラビア語）、村民の口述語りの引用文はアーンミーヤ（口語アラビア語）で書かれている。転写が必要な際、描写文はフスハーでの転写（転写法は『岩波イスラーム辞典』岩波書店、2002年に従う）、口述語りの引用文は可能な限りアーンミーヤでの転写を心がけた。ただし「デイル deir」や「シェイフ sheykh」等、英語転写の際にアーンミーヤでの転写が定着している単語は描写文でもアーンミーヤ転写で統一する（例外として、Yāsīn は「ヤースィーン」と表記すべきだが煩雑を避けるため「ヤーシーン」とした）。人名はフスハー転写に統一し、頻出する近郊のアラブ人村については煩雑を避けるため長母音は削除した。
- ・[ ] は著者たちによる註記，〔 〕内は訳者による註記である。
- ・紙幅の都合上、付録の村落写真、関係文書は割愛した。

## 序文

ビルゼイト大学の「記録・研究センター」は、「破壊されたパレスチナ村落記録プロジェクト」を進めている。本書『デイル・ヤーシーン』は同プロジェクトの刊行物「破壊されたパレスチナ村落シリーズ」から出版される第4番目の小冊子である。以前に準備された3冊は、「アイン・ハウド」,「マジュダル・アスカラーン」,「サマラ」を取り上げている。〔これら村落の位置は地図1参照〕

1948年戦争が起こった当時、パレスチナには807のアラブ人村と都市があった。この内の479村・都市は戦争中にイスラエルが占領した地域の中に落ちた。この中で1948年～50年の間に破壊された村は370を超えた。建物や建造物の破壊の度合いは場所によって異なっていた。大部分の家がそのまま残っているという村もあるが、元の住民だったパレスチナ・アラブ人たちは完全に退去しており、その後にはユダヤ人家族たちが移り住んだ。また、家は壊されたものの壁はいくつか残ったままだったりなど、村の痕跡が残る場所もあった。しかし、圧倒的多数の村は破壊され、その存在が抹消された。跡地にはイスラエル入植地が作られ、耕され、農地として使われ、あるいは植樹され森林となった。こうした違いはあれども、これら全ての村に共通して言えるのは、土地に根づいた人間共同体としての実体を破壊され、抹消されたという事実である。

あと数年も経てば、これらの村から退去させられた住民で約40年前の当時に成人であった人々は少なくなり、見つけ出すのが難しくなるだろう。かつての住民だった世代が失われれば、これらの村々の情報もなくなり、古い地図上の単なる地名としてしか残らない。「破壊されたパレスチナ村落記録プロジェクト」は、次世代に向けて破壊された各村が持っていた固有のアイデンティティと特殊性を保存するため、これらの村に住み、村の姿を直接知る人々から情報を集め、体裁を整え、記録に残すことを目的としている。



これが壮大な計画であることは承知の上である。このプロジェクトの大部分の遂行を妨げる理由や条件はいくつもある。それゆえ確実に成果を残せるよう、手始めに異なる地域のいくつかの村から始めることにした。たとえそれが、1940年代のパレスチナ社会という広い範囲に照らしてみれば、僅かな一部に過ぎなかったとしても。破壊された村々の中で、同プロジェクトの枠組みで始めに取り上げることにしたのは、アイン・ハウド（ハイファ地区）、サラマ（ヤーファ地区）、イナーバ（ラムラ地区）、デイル・ヤーシーン（アル＝クドゥス〔エルサレム〕地区）、ダワーイマ（ハリール〔ヘブロン〕地区）、マジュダル（ガザ地区）である。

デイル・ヤーシーン村は、エルサレムから約6キロメートル西、エルサレムとヤーファーという主要二都市を結ぶ幹線道路からは約2キロメートル南に位置し、リフタ村、カルニヤ村、エイン・カレム村、マルハ村の土地に囲まれている。1940年代、村から最も近かったイスラエル〔原文ママ〕入植地はジャバアート・シャーウールであり、この入植地に建っていた家屋とデイル・ヤーシーン村の家屋との距離は100メートルほども離れていなかった。イスラエル人は現在、デイル・ヤーシーン村のあった場所を「ジャバアート・シャーウール・バー」〔ヘブライ語ではギブアート・シャーウール・ベート〕と呼ぶ。

イギリス委任統治政府の統計によれば、1922年のデイル・ヤーシーン村の人口は約254人、1931年には491人、1945年には610人だった。先住者である村民たちは、1948年の追放が起こった時点での人口は750人だと推計している。

デイル・ヤーシーン村の土地面積は、1945年時点で2857ドゥナム〔1ドゥナムは約1000平方メートル〕であり、そのうち村の居住地が建っていたのは12ドゥナムで、1979ドゥナムは耕作に不向きな土地だった。約153ドゥナムはユダヤ人の手に流れた。

1948年4月9日、デイル・ヤーシーン村は「レヒ」と「エツェル〔イルグ

ンの別称)」という2つのシオニスト武装集団の攻撃に晒された。彼らはデイル・ヤーシーン村で史上例を見ない虐殺を行った。「デイル・ヤーシーン」という名前は世界に知られる所となり、1948年戦争全体の成り行きにも大きな影響を与える事件になった。「デイル・ヤーシーン村」の虐殺について語る史料を集めると、犠牲者数は250～254人だとされてきたが、我々の調査で複数の史料で言及される名前を正確に数え上げてみると、最終的に実際の犠牲者数は120人を超えないという結論に至った。犠牲者数を誇張したのは、虐殺を犯した武装集団たち自身だった。彼らは村や町からの追い出しの際に抵抗に遭わないよう、パレスチナ人住民たちの心の中に恐怖を投げ込もうと目論んだ。〔誇張された数字を鵜呑みにした〕アラブ側もこの目論みの格好の餌食となって一役買ってしまった。よって以下、我々の調査結果を示していく。

村の大部分は現在も残っている。村の主要部分はフェンスで囲まれ、村全体は精神病院に変わった。村の家屋は病棟になり、村のモスクは病院の食堂になった。男子小学校はシナゴグになり、村の住宅はなくなった。村の家屋や建物には、病院やシナゴグに変わったなどの機能上の変化を除けば、ほぼ変わらなかった。村の土地には工場や住宅地が数多く作られ、村全体は〔イスラエルの行政区域としての〕エルサレム市の一部になった。村の墓地に関して言えば、その約3分の2には舗装された大通りができた。村に残った住民ら数名がこれに抗議したとき、エルサレム市役所は残り3分の1の土地を壁で囲むという挙に出た。

この本に収めた情報の大部分は、1985年2月～5月にラーマッラー地区に住むデイル・ヤーシーン村の住民たちから集めた。彼らの協力には感謝を述べたい。この種の作業の多くには、欠陥や間違いが必ずあると承知しており、この点については予めお詫びしておく。本書の中で誤りや欠陥を見つけた方には、次版に反映できるよう正しい情報を提供してくれるようお願いする。

本調査で正式なインタビューを行ったのは以下の人々である。

サイード・アブドゥルアズィーズ・サムール〔男性〕

ムハンマド・アーイシュ・ザイダーン〔男性〕

アフマド・ユースフ・ハミーダ〔男性〕

シャムア・サラーフ・ハミーダ〔女性〕

ジャミーラ・ムハンマド・イスマーイール・ジャーバル〔女性〕

ハミース・ザイダーン〔男性〕

ムハンマド・ダルウィーシュ・ハミーダ〔男性〕

ハサン・ムハンマド・イスマーイール・ジャーバル〔男性〕

同様に、部分的な情報提供を行ってくれたのは以下の人々である。

ワヒード・ムハンマド・ザイダーン〔男性〕

イマード・ハミーダ〔男性〕

タイスイール・ハミーダ〔男性〕

インアーム・サムール〔女性〕

以上の人々、そして同プロジェクトを進める上で様々な手助けしてくれた友人たちに、最高の感謝と敬意を表する。たとえどれほどささやかだとしても、この研究が我々の同胞たちと友人たちに役立つものとなるよう願う。

既に述べた通り、本書は1948年以前に存在したパレスチナの約400の都市・村・居住地を記録する大きなプロジェクトの中の一章に過ぎない。手に取っていただいたような小冊子形式で出版された各村の記録は、我々がこれらの村について集めた膨大な量の資料、文書、写真の中から選ばれた僅かなものでしかない。我々はこれらの資料を、将来同プロジェクトの枠組みで行われる学習や研究に備え、ビルゼイト大学記録・研究センターのアーカイヴに収めておく。

学習者、研究者、関心を寄せる皆さんには、このアーカイヴの中身の検討や情報の活用を呼びかけたい。

「破壊されたパレスチナ村落記録プロジェクト」の考案・実施はシャリーフ・カナアアナ博士による。現在、同シリーズの調査・準備・出版に参加している作業チームのメンバーは、シャリーフ・カナアアナ博士、ニハード・ザイターウィー、アスィヤー・ヌール・アッ＝ディーン、バッサーム・アル＝カアビー、ルブナー・アブドゥルハーディー、ムハンマド・アシュタイヤ、ラシャード・アル＝マダニーである。本書に添付された破壊された村の地図の準備は、カマール・アブドゥルフアッターフ博士が行い、村の写真撮影はシャリーフ・カナアアナが行った。同様に本書の印刷と編集は、フィトナ・バトゥルーフとリーナー・ハウィートが行った。

研究センター所長 シャリーフ・カナアアナ博士

1987年2月

## 第1章 村の民衆史

「デイル・ヤーシーン」という村の名前は2つの言葉から成っており、それぞれの言葉には由来となる物語がある。「デイル」という言葉は、西暦12世紀にこの村に住んでいたあるクリスチャン修道僧が建てた修道院と関係しており、それゆえ古くは「デイル・アン＝ナスル」と呼ばれていた。「ヤーシーン」と言う語は、「シェイフ・ヤーシーン」と呼ばれた人物に関わりがある。彼が村にやって来たことは確かだが、いつどこから来たのか、どういった人物なのかはわかっていない。しかし修道院の向かいにモスクがあり、「シェイフ・ヤーシーン・モスク」と呼ばれていた。村の住民たちは、自分たちの村はモスクと修道院の間にあったため、ムスリムとクリスチャン双方を満足させるよう「デ

イル・ヤーシーン」と名付けられたのだらうと異口同音に述べる。

「デイル・ヤーシーン村」の人々の信じる所によれば、この村で最初に家を建てたのは3人だったと言う。「村にやって来たのは3人だった。ハマーイダの1人、アキーリーヤの1人、シュハーダの家（dār）の1人だ。この人たちが基になり、その後で村ができた。」

村民同士の関係は、際立った結束や協力の下にあった。他の多くの村とは対照的に、デイル・ヤーシーン村には、複数のハムーラがあったにもかかわらず、ただ1人の村長（mukhtār）の下で統制されていたという事実が、これをよく物語っている。最初の村長はサムール・ムーサー・サムールで、30年間務めた。その後、イスマーイール・アトゥーフが5年務めた後、1920年にはムハンマド・ハリールが村長になり、5年間務めた後に辞任した。その後ムハンマド・イスマーイール・サムールが村長に選ばれ、1948年まで務めた。

村には諸々の法があり、村民たちはこれを村内の憲法のように扱った。これらの法は、村民たちの振る舞いを規定しており、村民たちは皆これに従って村外の司法に訴えることはなかった。各ハムーラから代表が選ばれ、4名から成る改善委員会が作られた。設立時の委員会メンバーは、ハミーダの家族（'ā'ila）のシェイフ・マフムード・サラーフ、アカルの家族のアスアド・リドワーン、シャハーダの家族のフサイン・ザイダーン、ジャーバルの家族のハーツジ・ジャーバルだった。

委員会は法の制定や、住民全員への周知徹底に従事した。これらの法の内の最初の法はマフル〔新郎の家から新婦の家に送られる婚資金〕を制限するものだった。これは金持ちも貧者も平等に婚姻に恵まれるようにするためだった。このため村は「ヤーシーン式婚礼（al-jīza al-yāsīniya）」で有名だった。あるシェイフがこれについて語っている。「ヤーシーン式婚礼は、質素で高いマフルもなく、花婿にも黒い〔不器量な〕女にも白い〔美人の〕女にも損得なしに皆同じようにするんだよ。こう言っちゃなんだが、朝くらいは綺麗な女の顔が見ら

れるようにと自分の命まで投げ出してしまふ奴までいたんだから。」

マフルは38リラに設定され、花嫁の父に支払われた。花嫁の父はこの資金で家具や花嫁の身の回り品全てを準備する。改善委員会はマフルの制限だけには飽き足らず、婚礼が終わるまで法が守られているかを見届ける。そして花嫁の父親の家に行き、父親には38リラ以上は受け取らないこと、花婿にはこの金額以上は払わないことを「クルアーン」に誓うよう求めた。

時にはいくつかの違反があったり、委員会の決めた事柄に従わない場合もあった。違反した者がどんな地位にあったとしても、委員会は分け隔てなく適正に処罰した。あるシェイフの語った次の出来事は、委員会に備わっていた統制力や権威を最も良く物語っている。

トルコ時代のことだが、兵役でエジプトに行って捕虜になりたいとこがいた。結婚したけど奥さんとの間には子供ができなかった。こいつは〔改善〕委員会の長シェイフ・マフムード・サラーフの弟だった。ある時、こいつが月のように綺麗で村の誰より美しい16歳の娘に結婚を申し込んだ。この娘の母は「自分の娘は年寄りにはやらないよ」と言って断った。男は母に言った。「追加であんたに10リラ支払おう。これで承諾しておくれ。誰にも秘密だよ。」母はこれで手を打った。〔婚礼でクルアーンの〕開扉章が読まれた時、花嫁の父は38リラを受け取った。

次の朝、他の女たちがやって来て花嫁の母に言った。「あんた、自分の娘は年寄りにはやらないと言ったじゃないか。」母は女性たちに、「私の娘は他の娘とは違うんだ。うちの娘の価値は50リラだよ」と言った。

次の日、今度は委員会の長シェイフ・マフムードが他の者たちと一緒に〔別の〕娘に結婚を申し込みに行った。するとこの娘の父が「私の娘は50リラだ」と言った。シェイフは娘の父に尋ねた。「なぜ50リラなんだ？この娘は他の娘以上に美しいと言うのか？」娘の父が彼らに言った。〔シェ

イフ・マフムードに対して]「なぜ昨日あなたの弟は50リラ支払ったのか？シェイフよ、まずは自分の所の問題を片付けるんだな！」

その後、シェイフ・マフムードは弟に問い質した。「お前は子供が欲しいから結婚したいんだろう？そして今、クルアーンに誓おうとしている。お前は神に嘘の誓いを立てれば、自分の子種がなくなることは勿論わかっているんだろうな？」弟は花嫁の母に余分に20リラを支払ったと自白した。

その後、委員会の者たちが最初の花嫁の父に聞いた。「あなたの娘はどうして50リラになったんだ？」花嫁の父は、「私が受け取ったのは38リラだけだ。娘の母親が残りを取ったのか、私にはわからない」と言った。委員会の者たちがこれに裁定を下し、花嫁の父には余分に受け取ったお金を返すよう、花婿には村の共同基金に2リラを納めるよう言い渡した。

さらに、花婿自身には婚礼費用は一切かからず、花婿のハムーラが分け合っ  
て婚礼費用を出した。

花婿の親戚たちは、花嫁への贈り物を用意したり、仕事で儲けを上げたりして手伝うんだよ。彼がお金を払わなくていいようにするんだ。彼の家の者は皆マンサフ〔婚礼時に振る舞われる料理で、羊肉と米をヨーグルトで炊きこんだ料理〕を持って来なけりゃならない。羊肉1ラテル〔3キロ〕分だよ。それから花婿に2ディナール払うんだ。もしお客が少なくて食事が余りそうなら、マンサフにいくらかかるかを計算して花婿に「乾きもの」を渡すんだよ。つまり現金さ。それから同じハムーラの誰かに家々を周らせて、台所を綺麗にして料理しているかどうか確かめさせるんだ。

婚礼では、夜の宴会が3日間続き、各宴会の費用は全て花婿の親戚が1人ず

つ受け持つ。花嫁は大抵、同じハムーラから選ばれ、外の間人が選ばれることはほとんどなかった。花嫁はハムーラのシェイフたちの合意で決まった。「女性がハムーラの外に出て結婚することはほとんどなかったよ。家族から離れることは他の国に行くようなもんだった。12歳の女の子だって同じハムーラの男と結婚させようとしてたよ。よその男と結婚させることは一度もなかった。」

婚礼には別の慣習もあった。花婿は、父方・母方両方のおじに「ヒドゥム」という着物を準備することになっていた。以前は値段の上限はなかったが、委員会ができるヒドゥムの金額は5ディナールと設定され、送る枚数も1着だけになった。花嫁に父方・母方おじが両方いれば、花嫁の父がヒドゥムをもう1着送った。大抵は「イフティヤリーヤ (ikhtiyārīya)」と呼ばれる村のシェイフたちが花嫁の家に行き、花嫁が自分の家を出るまで問題なく進むかどうかを見届ける。その問題とは、例えばある婚礼で起きた次のような事件である。

ある時、結婚式がいつもより長引いて、花嫁が姿を見せないことにシェイフたちが気付いた。「みなさんどうされたのか？何かあったのか？」と聞いた。花嫁の父方おじは頑固な奴で、10リラもらわなければ断固として娘を出さない、そうじゃなきゃ離婚したっていい、と言うんだ。すると客の一人が言った。「私が自腹で5リラ払おう。花婿は5リラ払うんだ。式が取りやめになっちゃ大変だ。」それで花嫁のおじに10リラ渡したら花嫁が出てきたんだよ。5リラを払った男はその後委員会に文句を言いに行った。そしたら委員会は花嫁のおじに遣いを送り、「明日の朝は仕事には行かぬように。我々がお前の所に行くから」と伝えた。朝から20人ほどの男たちが奴の家に行った。奴がコーヒーを出しても男たちは受け付けない。奴は男たちに聞いた。「みなさんどうされたのか？何かあるんですか？」男たちは奴がやったことを叱り、「余分に受け取った5リラを今すぐ払え」と言ったんだ。奴は「みなさん、そうは言っても私は妻との離婚



「唐殺」の物語の奥行き

に誓ってしまったんですよ」と言った。男たちは「するとお前は20回でも離婚することになるだろう。金さえ払えば、我々は今日お前の所で昼食を食べて行ってやる」と言った。奴は金を払い、屠った牛を持ってきて男たちに食べさせた。

結婚式で行われる花婿側の行進 (zaffa) は、花婿の家から始まり、ジャルジャール地区を通して脱穀場へ行き、シェイフ・ヤーシーン広場まで進む。そこで夜遅くまで「ダブカート (dabkāt[dabkaの複数形])」[という踊り]や、[手を取り合って踊る]「サハジャート (ṣaḥajāt)」が行われる。行進の間、女性たちは花婿と村民たちを讃える歌を繰り返し歌う。例えばこんな歌がある。

おお 我らの家 お前の周りにはレモンの木  
おお 我らの家 おお 我らの家  
着飾った者たちに椅子を出しましょう  
あちらの家から我らの家へ  
おお 我らの家 お前の周りにはリンゴの木  
おお 我らの家 おお 我らの家  
素敵の人々に椅子を出しましょう  
あちらの家から我らの家へ  
おお 我らの家 お前の周りにはテレビンノキ  
おお 我らの家 おお 我らの家  
花婿に椅子を出しましょう  
あちらの家から我らの家へ

行進する人々が花嫁の家に着いた時には次のように歌っていた。

立ち上がって出てきておくれ 立ち上がって出てきておくれ  
何を案じているんだい

君の父と〔父方〕おじには支払い済みだ

立ち上がって出てきておくれ 立ち上がって出てきておくれ  
あなたのところから

君の父と〔母方〕おじには支払い済みだ

花嫁側の行進は夜間に行われた。花嫁は雌馬に乗り、女性たちが馬を歩かせる。行進中、誰かの家の前を通る時は家の主人の妻が出てきて花嫁に「ヌクート (nuqūt)」という贈り物を差し出す。これは女性たちが花婿の家に着くまで続く。翌朝、女性たちが「ヌクート」のためにやって来るが、前日の行進ですでに「ヌクートを渡した (naqqat)」女性は来なくてもよかった。アブー・アーイシュ氏は過去の日々を思い出してこう語る。

もう二度と戻らない昔の話だ。座り込んで生姜汁を飲んでいたものさ。  
紅茶はなくなってね。結婚式は三日三晩続き、皆幸せそうに楽しんでいた。  
こんな歌も歌ったよ。

彼女は家の扉から覗いては戻る

まるで私に太陽の光が差すかのよう

彼女を呼んでもまるで聞こえていないかのよう

それともその瞳は眠りに誘っているのか

私はハッタ〔頭にかぶる男性用スカーフ〕を被り 君の後ろには髪飾り

君は私の心の3分の2を取り去ってしまった

ああ兄弟よ この幸せ者 あの娘を迎え入れるだなんて

まるで天国 彼の城には12のバルコニー

村民たち同士は互いの宗教儀礼を尊重し続けた。1歳に満たない小さな子供が亡くなると、村民たちは皆、遺族を慰めるために仕事を休み、40日間は婚礼を全て延期するよう求めた。デイル・ヤーシーン村民のあるシェイフはこう語る。

〔19〕32年、私がカスタル村で働いていた時、息子が死んだとの知らせを受けた。息子はこの時1歳だった。家に戻ると、村中の皆が家に駆けつけていた。シェイフ・ムハンマド・アティーヤが村のハムーラ全部を呼び出していたんだ。

昔は皆いい人たちだったよ。息子の割礼の時も、各ハムーラから必ず1人はその子の親にマンサフを送らなきゃいけなかった。1ラテル半〔4.5キロ〕の羊肉と花で飾ったマンサフだよ。

他の者は言う。「トルコ時代のある時、1か月ほど雪が続いて村は孤立し、皆にっちもさっちも行かなくなった。そしたら裕福な者たちが皆——神よ、彼らに祝福を——外に出て叫んだんだよ。『物が足りない奴はジュルン〔脱穀所を意味するが、「収穫物の収益を得る翌年夏まで置いておく場所」を指したと言う〕まで取りに來い。むやみやたらに取るんじゃないぞ』ってな。」

村では誇り高さや寛大さに加え、村民同士の協力と関わり合いの精神が広がっていた。これらは自発的なものでも突発的なものでもなく、組織され、統制されたものだった。例えば、各ハムーラは貸出基金を持っており、ハムーラ内の各男性は毎月2ディナールを基金に払わねばならなかった。ハムーラ内に必要な人がいれば、家計が持ち直せば借金を返すという条件で誰でも借りられた。各ハムーラからは誠実で信頼の厚い人物が代表に選ばれ、基金の運営にあたった。ハムーラ・ハミーダからはユーセフ・アフマド、ハムーラ・シャハー

ダからはアリー・ハサン・ザイダーン、ハムーラ・アカルからはハーッジ・アスアド、ハムーラ・サムールからはアブドゥルアズィーズ・サムールが選ばれた。また、村全体の代表にはサイド・ユーセフ・アフマドが選ばれた。理由は、彼は神を畏れる敬虔な人物で、貧者のニーズを満たせるよう皆に協力を促すことにおいて適材だったためである。彼の息子は、子供の頃、貧者に必要物資を届けるために夜中に出かけていた父について記憶している。「父は夜、外衣（'abāya）を着て村の家々を周り、砂糖や米やパンを村民たちから集めていた。誰にやるかなんて聞く人がいたら、そいつからは物を受け取らなかった。集めた物資は均等に分け、貧者たちに渡したしていたよ。渡す時には誰にも気づかれないよう気を遣い、後で恩着せがましくされて貧者が劣等感を感じないように外衣の下に隠して渡していたよ。」

ある村民は、デイル・ヤーシーン村の方言にはリフタ村や近くのエイン・カレム村やカルニヤ村の方言とは違う特徴があったと言う。「リフタ者たち（al-Lifātwa）やエイン・カレム者たち（al-Akārāma）は音を伸ばして発音したよ。例えばファーティマという名前を言う時、彼らはファーティマーと言うけど、カルニヤ者たち（al-Qālūnyāt）は短く切ってファティマと言う。私らヤーシーン者たち（al-Yāsīniyāt）はきっちり正確にファーティマと言うよ。」

村民の装いはパレスチナ南部の多くの村で知られていた。女性たちは刺繍の施された袖の広い農民の（ムラッダン muraddan と呼ばれる）着物を着て、白くて長いスカーフを頭にかぶり「アジャミー（'ajamī）」という布ベルトを腰に巻き、前で結んだ。

村にはゲストハウス（maḡāfa）が2つあった。1つはシャハーダの家のもので、もう1つはハミーダの家のものだった。

ゲストハウスにはいつも泊り客がいて、空きのある日は1日もなかったよ。ゲストハウスの主人はしっかり者で、お蔭で村のけちな奴がかすんで

しまうほどだった。彼は寛大にもゲストハウスを開いたけど、一番良かったのは奥さんが笑顔で客に接していたことだね。客を出迎えて挨拶する時、主人が頼りにしてたのは奥さんだった。私たちは羊の頭としっぽを大皿に乗せて、羊肉を花やパセリで飾って客をもてなしたんだ。羊を一頭丸ごと屠ったとわかるようにさ。

デイル・ヤーシーン村の人々は、かつて村に住んでいた人々にまつわる物語を語り合っていた。これらの物語は賢さや知恵にまつわる物語、力や勇敢さをめぐる話だった。以下の人々についての物語は村全体の財産と遺産になっている。

■シェイフ・マフムード・サラーフ（1887年～1943年）

パレスチナ全域レベルとまではいかないが名の知れた人物の1人。シェイフ・サラーフの父は、幼い時期から息子の知恵と才能を認め、成長すると勉強のためにベイルートに送った。彼は法学を学び弁護士の資格を得た。彼の法廷弁術の素晴らしさは有名で、請け負ったどんな事件も解決した。彼は皆から愛される性格で、村には彼の個人資産で建てられたモスクがあり、彼の名が付けられている。村の女性たちは彼を偲ぶ多くの歌を繰り返し歌った。その1つが以下である。

デイル・ヤーシーンよ 恐れるな

シェイフ・マフムードがあなたのもとにやって来る

モロヘイヤをこしらえた 肉にひよこ豆も

シェイフ・マフムード 我らとずっと一緒に

モロヘイヤをこしらえた 脂ののった肉も

シェイフ・マフムード 幾年も一緒に

レモンよ、おおレモンの木よ 高い木も低い木も

神よ シェイフ・マフムードを守りたまえ 私を助けてくれた彼を

レモンよ、おおレモンの木よ 高い木も木になった実も

神よ シェイフ・マフムードを守りたまえ 彼を助けたまえ

#### ■ザイダーン（シェイフ・アッ＝シャバーブ）

力と勇敢さで知られた人物で、彼については以下の逸話がある。「何人かの村民の家畜たちがエイン・カレム村の土地に降りて行ったことがあった。そしたらその地主が来て、家畜の持ち主に抗議するとか懲罰してやると言って家畜を取り上げたんだ。するとその場にいた村民の1人が地主にこう言った。『家畜を返した方がいい。ザイダーンが知ればあんたは既に失った以上のものを失うから。』地主はこれに応じなかった。そしたらザイダーンがこれを聞きつけ、奴らの後を追ったんだ。初めてザイダーンを見たエイン・カレム村の地主は、彼が縦にも横にも大きいのに驚き、残りの羊を置いて逃げて行った。」

#### ■ハミース・ザイダーン

ザイダーンの孫の1人。彼もまた勇敢さと力で有名だった。村民たちによれば、彼は「ラクダを腕で殴り倒していた」人物だという。現在110歳で、今もまだ精神面でも肉体面でも力は衰えてない。村で最年長だと思われるが、現在（1985年アーザール月）わずか1歳の子供がいる。

## 第2章 ハムーラとアーイラ

村の起源はシャハーダ、ハミーダ、ジャーバル、アカル、ジュンディーの5つの主要ハムーラに遡る。これらのハムーラはいくつかの部分 (butun) から成り、ハムーラ・シャハーダから広がった家族（アーイラ）はサムール、ザイ

ダーン、ハムダーン、アブドゥッラーである。ハムーラ・ハミーダから広がった家族はサラーフ、サーリフ、カースィムである。ジャーバルから広がった家族はジャバル、ムハンマドである。ハムーラ・アカルからはリドワーン、ザハラーン、アティーヤ、アター・アッラーの家族が生まれた。ハムーラ・ジュンディーから広がった家族はアフマドとイスマイルである。加えて、村にはイードとハサンという独立した2つの小さな家族がある。

①ハムーラ・シャハーダ

このハムーラには、自分たちはエジプト出身だという者も、シャーム〔現在のシリア・レバノン・ヨルダンおよび歴史的パレスチナ〕出身だという者もいる。ハムーラ・シャハーダは力と勇敢さで有名で、オスマン帝国時代にアッカー〔パレスチナ北部の沿岸都市〕総督だったアフマド・バーシャー・アル＝ジャザールは彼らの親戚筋だと言われる。このハムーラからはサムール、ザイダーン、ハミダーン、アブドゥッラーの家族が生まれた。数で言えば最大ハムーラの1つと見なされていた。このハムーラ出身のサムールの家族には教師だったサイド・サムールや彼のいとこムーサー・サムールなど、村で最初に高等教育を受けた者たちがいたという。このハムーラ内での最大地主はサムールの家族とハムダーンの家族である。

②ハムーラ・アカル

このハムーラの人々は自分たちの出自は東ヨルダンのアキーリーヤに遡ると考えている。このハムーラからは4つの家族、リドワーン、ザハラーン、アティーヤ、アター・アッラーが生まれている。

③ハムーラ・ジャーバル

村民たちはこのハムーラの出自はエジプトに遡り、ジャーバルという曾祖父

が祖先だと考えている。このハムーラは村の中央部に住み、彼らからはジャバルとムハンマドという2つの家族が生まれた。

④ハムーラ・ハミーダ

このハムーラの人々は、自分たちの出自は東ヨルダンのハミーディーヤに遡ると考えている。ここからサラーフ、サーリフ、カーシムなどいくつかの家族が生まれた。このハムーラは村の南側に住み、寛大さと勇敢さで知られた。中でも名声を誇ったのがシェイフ・マフムード・サラーフだった。彼は村だけでなくこの地域一帯でもその名が知れ渡っていた。

### 第3章 40年代の村落

デイル・ヤーシーン村は高い丘の上に位置する。家々は傾斜に沿って広がり、その周りには果樹や松の木があった。村を訪問する者たちの目には、それぞれ異なる特徴を持つ二種類の家が際立って見えた。1つは近代的な造りの家で、白い石材が美しく調和的に組み立てられており、村の入り口から始まって旧村落の中心にあるハーラ地区まで続く。そして、もう1つは古い造りの家で、約1メートルもの分厚い壁をもっていた。

村の入り口から数メートルでジルジャール地区が始まる。この地域を通る道の右手には、以下の人々の家々があった。ムハンマド・アリー・ファルハーン、ヤアクーブ・アリー・ファルハーン、アフマド・アスアド・リドワーン、ムハンマド・サイード、ムハンマド・ザハラーン、ザハラーン・マフムード・ザハラーン、ムスタファー・マフムード・イード、ハーッジャ・サバハ・リドワーン、ユースフ・アフマド・ユースフの家である。

通りの左手には以下の家々があった。ハリール・ユースフ・アル＝バスティーの家、村の男子小学校、ムハンマド・サムールの家、誰のものか忘れら



れた家、シェイフ・ムハンマド・アティーヤの家、イブラーヒーム・アティーヤの家、ムハンマド・カースィムの家、ハサン・サーリフの家、マフムード・ムスタファー・ジャーバルの家である。

ジルジャール地区の後はマドバサ地区が続く。そこにはムーサー・ハサン・マスリフの家、アブドゥッラー・イスマーイールの家、ムハンマド・イスマーイールの家、アリー・ハサン・マスリフの家があった。

その後アサーラ地区があり、その右手には以下の家々があった。アブドゥルアズィーズ・サムールの家、アブドゥルマジード・サムールの家、アブドゥルハミード・サムールの家、ムハンマド・イスマーイールの家、ハーッジ・ハリール・イードの家、ムハンマド・ハリールの家、ジュムア・アブドゥルハミード・サムールの家、アーリフ・サムールの家である。左手には以下の家がある。ムハンマド・イスマーイール・サムールの家、イスマーイール・ムハンマド・サムールの家、ムハンマド・ジュダ・ハミダーンの家、ムーサー・イスマーイール・サムールの家、ムハンマド・サムールの家、アフマド・イスマーイール・サムールの家、ムスタファー・アリー・ザイダーンの家、アリー・ムスタファー・ザイダーンの家、ムーサー・ムスタファー・ザイダーンの家、イーサー・ムハンマド・イードの家、ムハンマド・イーサー・イードとサイード・ムハンマド・イードの店、ムスタファー・ムハンマド・イードの家、ジャーバル・ムスタファーの家、ダーウッド・ジャーバルの店、サーディク・ジャーバルの家、タウフィーク・ジャバルの家、アブド・ラシードの家、アブド・ハリリーヤの家、サーリフ・リドワーンの家、マフムード・ムーサーの家、ムーサー・マフブーバの家、アフマド・イスマーイールの家である。

村の西部には以下の者たちの家がある。ハミース・ザイダーン、マフムード・アスアド、マフムード・サラーフ、ムハンマド・アター・アッラー、ムハンマド・ハリール、アーイシュ・ハリール、シェイフ・マフムード・サラーフ・モスク、サーディク・ジャバル、サイード・サラーフ、アーリフ・サラーフ

フ。

その後、バヤーディル（あるいはナワーディル）地区があり、ここに以下の者たちの家があった。ハーッジ・アスアド・リドワーン、サーリフ・イスマーイール・アル＝ジュンディー、アフマド・イスマーイール・アル＝ジュンディー、アフマド・アスアド、マフムード・アスアド、ムハンマド・イスマーイール・サムール、ムーサー・イスマーイール・サムール、ムーサー・ハサン・マスリフ、アリー・ハサン、そしてサラーフの家のフーシュ〔中庭付き住居〕にはシェイフ・マフムードと彼の兄弟ムハンマド、アフマド、アブドゥルアズィーズが住んでいた。

最後に旧村落の中央部にはハーラ地区があり、以下の建物がある。ハーッジ・ムハンマド・サムールの家、アフマド・ムーサー・サムールの家、サムール・ムーサー・サムールの家、ムハンマド・ジュダ・ハムダーンの家、アフマド・ハサン・ジャーバルの家、マフムード・サイドの家、マイケルの家、イード家（'al）のフーシュにはイーサー・イード、アリー・イード、ジャミール・イード、イスマーイール・イードら4つの家がある。イード家のフーシュの次にはハーッジ・イスマーイール・アティーヤの家、イブラーヒーム・アティーヤの家、ムハンマド・アティーヤの家、アリー・ハリール・ムスタファーの家、アブド・ジュンディーの家、アフマド・アーイシャの家、それから村の広場、マフムード・カースィムの家、アリー・カースィムの家、シェイフ・ヤーシーン・モスク、村の女子小学校、そして修道院がある。

村には以下のような言及すべき歴史的建造物や場所がいくつもあ

## ■修道院

その起源は西暦12世紀、あるいはそれ以前に遡る。土地の広さは約1万平方メートルで、入り口から複数の部分に分かれ、それぞれ独立した造りになっ

ている。長いトンネルがあり（これは村民が掘り返した時に発見した）、ワード地区の入り口から修道院に辿り着けるようになっている。

#### ■ジャムルーナ、あるいは遺跡（khirba）

ジャムルーナ、別名遺跡（ヒルバ）は村の南西にあり、現在ユダヤ人は「ヒルベート・フート」と呼ぶ。ユダヤ人はこの村は彼らの祖先に遡ると主張するがどの時代に遡るのかはわかっていない。この遺跡には高さ2メートル半、幅3メートルの扉があり、中は埋葬地や墓地になっていた。村民は遺跡の中に財宝があると信じているが、ここは悪霊（jinn）に取り憑かれている場所だと考え、誰も中に入ろうとはしなかった。「[この遺跡は] 何かに護られていて怪物でいっぱい。日が沈めばあっちの方角には誰一人行けなくなった。中は黄金でいっぱいだという噂もあったが誰も中に入ろうとはしなかった。」

#### ■シェイフ・ヤーシーン・モスク

村の中心部にある。広さは12×20メートルで、中には広さ6×5メートルの聖廟があり、これがシェイフ・ヤーシーン廟と言われる。廟に近づく者やその上に座る者は間違いなく不幸に遭うと信じられていたため、廟に近づく勇気のある者はいなかった。モスクの前には大部屋があり、村民はこれをゲストハウスにしていた。また、婚礼の宴や夜の集まりに使われる大きな広場もあった。村民たちによれば、金曜日の夜になると決まってモスクの中から何か声が聞こえるらしい。モスクの中を歩き回るシェイフ・ヤーシーンの姿を見たと言者たちもいた。「村にはミフラブ〔モスク内で聖地マッカの方角に面する壁中央部に設けられたアーチ型の壁龕〕の中を意識なく歩き回るシェイフの姿を見た者がたくさんいる。シェイフは真っ白な服を着ていた。いつも金曜日の夜は皆広場に出て夜更けを楽しんでいたが、モスクの中から打楽器を打つ音が聞こえた。シェイフには子供がいて、その遺体がジャムルーナに埋まっていると

いう話をしたよ。」

### ■シェイフ・アビード廟

この聖廟は村の墓地の中心部にある。ここには祭壇のようなものがあり、皆ここで祈願（ドゥアー）や願掛け（ヌズール）を行った。特に女性が子供の祝福を受けるためや出産のためにやって来た。毎晩火の番をする者がおり、脱出〔ナクバ〕以前にこの聖廟の最後の責任者だったのは「マイーケル」という男性だった。

### ■カウワーア

トルコ時代末期に村の北西に建てられた軍事要塞。深さは約1メートル半ある。中は複数の部分に仕切られ、各部分は3×3メートルの広さだった。この仕切りは大砲とそれ扱う人間も一緒に入れる大きさだと村民は言う。そのため、要塞の中に立つ人間は誰からも見つからずに周りを見通すことができる。

また、いつ頃できたのかわからない古い井戸も複数ある。村ではこれらの井戸水を家畜に飲ませることもよくあった。井戸の造りは、上部は狭く底は広くなっていた。ある井戸は深さ約10メートル、底の広さは10×10メートルだった。他にも次のような井戸があった。村東部のハンマーム井戸、村東部の入り口近くのラーヒブ井戸、村入口右手のジョーザ井戸、墓地通り近くのズバール井戸、村西部のハッラ井戸、クルーム地区の東井戸、村南部のハリーカ井戸などである。

村の洞窟には以下のものがあった。

### ■ブガール洞窟

村南部にあり、特に村外から放牧に来た者たちが家畜の寝床に使っていた。

### ■墓地の洞窟

村の墓地近くにある。ある村民によれば、ここは「取り憑かれて」おり、特に夜ここに近づくことは恐れられていたらしい。ある住民はこんな話をしてくれた。

よくシェイフたちが話してたよ。ある時、村の男たちが洞窟の話をしてたんだ。悪霊がいるとか、そんなのは馬鹿げたことだ、悪霊も何もいやしないとか言っていた。ある男が、「ここは一つ、中に悪霊がないことを俺が証明してやろう。夜になったら洞窟に行ってやる」と言ったんだ。皆は賭けをして言った。「お前の言う通りかどうか、朝起きて洞窟に見に行こう。もしそこにお前の打った杭くいがあったらお前の言う通りだ。お前は勇者ということになる。さあ、行って杭を打って来い。」夜になり、あいつは杭を持って洞窟の中に打ちに行った。たが、運悪くあいつの外衣の裾が杭の下に入り込み、あいつは何も気づかず杭を打ってしまった。そして立ち上がろうにも立ち上がれないので、本当に悪霊たちがいて自分の外衣を引っ張っているのだと思いこんじまったようだ。あいつは遂に洞窟から帰って来なかった。朝、村の男たちが洞窟に行くと、外衣が杭に打ち付けられたまま死んでいるあいつの姿を見つけたんだ。

村には約 1700 ドウナムの農地があり、うち半分にはほぼ穀物が、もう半分には果樹が植えられていた。村はブドウ栽培で有名だった。マドバサ山という山では、ブドウを干したり、蜂蜜を精製させていた。また、村はオリーブ栽培でも有名で、アラヤーン地区やダンフ地区、フルーバ地区など村各地でオリーブが植えられていた。

村民の大半は農業に従事しており、村とエルサレム中心部をつなぐ道路を通じてエルサレムや周辺入植地で農産物が販売された。この道路は、ユダヤ人入植地のジャバアート・シャーウール、リフタ村、ヤーファー通り、旧市街のハリール門〔ジャッフア門〕を通る道だった。1925年に馬が引く荷車〔馬車〕が村にやって来るまで、住民たちの移動手段はラクダや馬などの家畜だった。その後、自動車が出来て来た。あるシェイフは、村に初めて自動車がやって来た時の様子をこう話す。「〔19〕20年のことだよ。大きな音が聞こえたので見に行くと、イギリス人が馬のないカートを持って来てたんだ。音はエルサレム旧市街まで響いていたよ。車輪にゴムがなかったからさ。1年半ぐらいたら鉄の型をまとった自動車がやって来た。〔19〕25年には馬の荷車がやって来て、皆これを買っていった。〔19〕27年にはトラックが初めて村にやって来た。リフタ村の誰かが1千ポンド以上で買ったんだ。」

1930年代には、村民はバスに乗るためにジャバアート・シャーウールに行くようになった。1935年にはリフタ村の住民数人がバス会社を創り、デイル・ヤーシーン村の住民にも呼びかけて「リフタ＝デイル・ヤーシーン・バス会社」を設立した。バスはエルサレムから1日3回、朝7時、朝9時、午後2時に定期的に村にやって来るようになった。

1920年代初めまで村民はずっと農業だけで生計を立てていた。イギリスはこの国にやって来ると、ユダヤ人にパレスチナ移住への門を開き多くのユダヤ人を引きつけた。結果、建設活動が促され、石材やその他建築資材の需要が増え、住民の大多数が建設業で働くようになった。というのも、パレスチナ全域のなかでもデイル・ヤーシーン村の土壌には岩石質という特徴があることが知られていたためである。そのため村の中心産業は農業から製造業に移行した。「村の土地から石油や金が出て来たようなもんだよ。〔ブヌード（しましま）〔英語のからの借用語 band（<sup>しま</sup>縞）の複数形と思われる〕〕と呼ばれる層が10あったんだ。赤、黄、蛇、パーティ、ワッラーキー、マカーディムと呼ばれる縞だ

よ。イギリス人たちが来た後は皆土地で働くのを止め、建設現場や工場の労働者になったり、イギリス軍と仕事するようになった。自分の土地で農業を続けた人はおそらく5%だけだ。」

作業効率を上げるため掘削機が必要になった。最初の掘削機は1927年に造られ、その所有者はアフマド・アスアド・リドワーンだった。その後、〔村全体で〕4台の掘削機が購入され、ザイダーンの家、サムールの家、ハミーダの家、ジュンディーの家が1台ずつ所有した。農業や建設材製造の他、イギリス軍基地で働いた村民も多かった。村で最初に基地で働いたのは、アフマド・イード、ムハンマド・アーイシュ・ザイダーン、ムハンマド・アブドゥルラフマンだった。イギリス軍と働いたある人はこう述べる。「〔19〕38年から48年までの10年間、イギリス軍と働いた。奴らが私たちにくれたのは20ピアストルだったが、ユダヤ人には40ピアストル渡していた。私たちがなぜユダヤ人の取り分が多いのか聞いたら、奴らは『お前らは家に戻れば自分の土地にトマトもズッキーニもあるだろう。だが彼らは何も持っていない可哀そうな奴らなんだ』なんて言うのさ。」

他にも、村では次のような単純労働の仕事がいくつかあった。ムハンマド・カースィムとマフムード・カースィムは大工仕事をし、また村にいくつかあった食料雑貨店はハミース・ザイダーン、ムハンマド・イーサー、アブド・カアビル、タウフィーク・サラーフのものだった。ヤアクーブ・アリー・ハサンは電気技師だった。また、村には石材や建築資材を運ぶトラック運転手にはアリーフ・サラーフ、アリー・ハサン、ターカル・サラーフ、ムハンマド・ユースフなどたくさんいた。

教育はクッターブ〔クルアーン暗唱を中心とした初期教育〕から始まり、読み書き、計算、クルアーンの教育が2年間行われた。毎週木曜日〔ヨーム・アル＝ハミース〕、生徒たちは簡素な授業料を払っていた。これは「ハミースィヤ」と呼ばれ、現金で0.5ピアストルを支払うか、卵1個とパン1塊で支払っ

ていた。子供への教育はいつも村民たちにとっての関心事であり、奨励された。あるシェイフは、5歳だった頃、母親に連れられてクッターブに通っていた時の様子をこう記憶している。「母は嫌がる私を抱いてシェイフの所に放り込んだ。〔19〕16年のことだった。40人ほどの子供と一緒に勉強していた。3か月でクルアーンのアンマを終える〔クルアーンを30巻に区切った際の最後の巻まで暗唱する〕と、父親は子供のために米の牛乳煮〔「バフタ」と呼ばれる甘いデザート〕やマンサフで宴会を開き、子供の友達も皆招待して歌って騒いで大きな宴会を開いたよ。息子が一番の成績でも取ったかのようにだった。」

村のクッターブで最初に教えたシェイフはシェイフ・ハーミド・ハミードで、その後シェイフ・ムハンマド・アティーヤが教えた。トルコ統治の時代は、教育はクッターブ形式で行われたが、20年代には状況が変わった。1926年、初めての〔イギリスによる〕公立小学校がカルニヤ村にできた。当時、デイル・ヤーシーン村からは5人の子供がこの学校に入学した。彼らはハサン・アスアド・リドワーン、ムハンマド・アリー・ザイダーン、イスマーイル・アティーヤ、ムサー・ザハラーン、ムハンマド・イード、ムハンマド・アーイシュ・ザイダーンだった。しかし当時は生活状況が厳しく、最後まで勉強を続けられた子供はおらず、途中で再び父親の仕事を手伝うようになり、石材運送などの仕事を行った。「当時、金銭的に言えば暮らし向きが良いとは言えなかった。学校は無料でも、学校には歩いて通うもんだからそれに合った靴や服を買う余裕のある者たちしか子供を学校に通わせられなかった。」

1930年代には村の子供たちはリフタ村の公立小学校に通うようになり、その後エルサレム中心部にあるラシーディーヤ学校やラウダ学院などに進んだ。1940年、デイル・ヤーシーン村の村民たちは男子小学校の建設を決めた。ザイダーンの家で会議が開かれ、村の全員が集まった。学校は「上サーリフ森」と呼ばれる土地の一部に建てられるという賛同を得た。学校の建設地は村民全員の共有地だった。この決定に関する正式文書が作られ、寄付を募るための委



員会も設立された。翌朝には工事用の石材も用意されていた。これはハミース・ザイダーンが自分の家を建てるために確保していた石材を寄付したためだった。この他、村民たちは「マラーフ・アル＝ナスラーニー」と呼ばれる土地を男子小学校の運動場のために寄付した。

その後、村の東側に学校が建てられた。この学校には大きく分けて3つの教室があった。最初の1年間はアミン・カティーナという教師が1人で務め、その後アブドゥッラー・ムーサー、サアド・アッ＝ディーン・アル＝ザイターウィーが務めた。最初に学んだ生徒たちは、ムハンマド・ムーサー、イスマイル・サムール、サイード・アフマド・サムール、アーイシュ・ムハンマド・ザイダーン、ムハンマド・ミナアム、ハサン・サリーム・ジャーバル、ファフミー・シャークル・ジャーバル、サリーム・アーリフ・サムールだった。

1943年、村にナフダ〔復興〕クラブが設立され、このクラブが女子小学校の創設を祝う式典を開いた。女子小学校はクラブの出資で建てられ、本部はシェイフ・ヤーシーン・モスクに置かれた。ハヤー・アル＝バルブーシーが教師に任命された。

1933年からはほぼ毎日、村に新聞が届くようになった。その1つが「大学」〔正式名称「イスラーム大学 (al-Jāmi'a al-Islāmiya)」〕。1933年にヤーファーで発刊されたが38年に英委任統治政府から出版許可を取り消された〕という新聞で、シェイフ・スレイマーン・アル＝ファールキーが編集者だった。この新聞はほぼ毎日、あるいは2日に1回村に届いた。ムハンマド・ザイダーン、ハサン・アティーヤ、マフムード・アスアドなどの若者がエルサレムからこれらの新聞を手配し、村の事務所や広場で声に出して読み上げられた。

医療については、1920年代まで（その後も部分的に）村民たちは民衆医療やハーブ投薬、その他のアラブ式療法に頼っていた。村で一番有名だった民衆療法士はハーッジ・ジャーバルだった。「私たちは長い間、西洋医学も薬も知らなかった。腹が痛くなればマラミーヤ〔ハーブの一種であるセージ〕を飲み、

背中を痛めたら双子を産んだ女性に背中の上で飛び跳ねてもらおう。尿が出なくなればアイン・スーバー〔カスタル村近くにあり、淡水の井戸で知られる〕の水を飲ませる。怪我をしたらタイユーン〔地中海沿岸に見られるキク科の黄色の草花〕という薬草とコーヒーを使う。』

村には腕利きの骨接ぎ師が多く、カースィム・ハミーダ、ハサン・ザイダーン、ハミース・ザイダーン、ムハンマド・ダルウィーシュ・ハミーダがいた。村民たちによれば、カースィム・ハミーダはエルサレムに住む「フーター」という医師からその骨接ぎ技術を保証する証明書をもたらったという。ムハンマド・ダルウィーシュ・ハミーダはアーキラという医師から骨接ぎを行う資格証書をもたらったという。ムハンマド・ダルウィーシュ・ハミーダは今ではもう90歳を過ぎているが、現在までこの仕事を続け、色んな土地から大勢の人が彼を訪ねている。彼がこの点について述べる。「行ったことのない町なんてないさ。シャームでもアンマーンでも骨接ぎをした。パレスチナでもほとんどの村で骨接ぎし、私の所にもたくさんの人が来た。西洋医学の医者たちが診られない患者が私の腕で良くなったんだよ。神のご加護のお蔭さ。ある時、ビール・ナバーラー村から私の所に来た男がいた。車の事故に遭い、7人以上の医者が彼の足はもう切るしかないと言ったんだ。だが私の所に70日いるとすっかり良くなって事故の前みたいに歩いて帰っていったさ。」

こうした状況は1920年代まで続き、その後村民たちは西洋医学を学んだ医師の許で治療を受けるようになった。「[19] 20年、村に『ティホー』という名前の医者 came。彼は「マハニー・イフーダー」〔エルサレムのユダヤ人入植地。ヘブライ語では「マハネー・イエフーダー」〕の人間だった。他にも『ヴァアラフ』〔ドイツ出身のユダヤ人医師モシエ・モーリッツ・ヴァアラフ。現在エルサレムにあるシャアレイ・ツェデク病院の創設者〕という医者があった。皆1シリングで治療を受けた。21年になると『ハッジャール』というアラブ人の医者 came。28年にはアーキラの家族から医者になった者がいて、村の者は皆、

彼の所で治療を受けるようになった。夜、病院に行ったとしたら治療代は1リアル・マジディー〔オスマン帝国時代の通貨単位〕だった。〕

#### 第4章 政治、戦闘、脱出

デイル・ヤーシーン村はエルサレムに近かったためトルコ人の関心を引く場所となり、軍の駐屯地になった。政府は兵役を強制し、これを免れることができたのは一人息子だった者や村外の女性と結婚した者だけだった。そのためトルコの統治時代には、姻戚関係はカウブル村〔ラーマツラーの13キロ北西〕、カルニヤ村〔エルサレムの6キロ西でデイル・ヤーシーン村の隣村〕、ヒルバ・アムール村〔エルサレムの12キロ西〕、リフタ村〔エルサレムの5キロ西でデイル・ヤーシーン村の隣村〕など村の外に広がった。多くの村民がトルコに行った戦争に参加した。イエメンでの戦争から村に帰って来たのは、アスアド・リドワーン、ハーッジ・ジャーバル、アリー・ハリール、ハリール・ルキーヤ、アリー・ザイダーンだった。

戦争の行軍中に亡くなった者も多い。暑さが激しい中、移動手段も十分でなかったためだ。水牛が大砲を引いて、ラクダが弾薬を運んでいたのだった。この時亡くなったのは、ハサン・ハリリーヤ、アイシュ・ザイダーン、ムハンマド・アリー・ザイダーン、ムハンマド・アフマド・ユースフ、ムハンマド・フサイン・ハーミド、ムサー・ルキーヤ、ムハンマド・アティーヤである。家族を失ったものも多い。理由は、長く兵役についている間に家族と連絡が途絶えたためだった。死んだと思っていた自分の娘と30年後に再会したという男の話もある。アフマド・ユースフ・ハミーダという村民は、ナースィラ〔ナザレ〕での兵役中、村民たちも知らぬ間に身寄りのない未亡人女性と結婚した。彼女は子持ちで息子2人と娘がおり、彼との間にも女の子が生まれた。夫がイエメンに行った後、妻が亡くなり、ナザレにいた彼の友人からの手紙で

夫は妻の死を知った。1年後、妻の連れ子だった娘が死んだとの知らせを受けたが、彼は死んだのが自分の実の娘の方だと思い込んだ。その後もそのまま彼の娘は母方お婆の家で育った。お婆は娘に、お前の父はエルサレムの村出身でアフマド・ユースフという名前だと告げていた。この娘はトゥールカレム地域のシュワイカという村の理髪師と結婚した。そして1945年、エルサレム近くのジープ村からこの村（シュワイカ）に働きに来た人々の一団が理髪師の所に散髪に来た。彼らは理髪師と色々話す仲になり、理髪師は自分の妻の父もエルサレム出身で、名前はアフマド・ユースフ軍曹（彼は軍曹と呼ばれていたため）だと話した。すると1人が、その名前を知っているが安否までは分からないと言った。理髪師は彼らを自宅に連れて行き、妻に紹介した。妻は読み書きができるアブー・アル＝アミンという男の所に行って父に手紙を書いてほしいと頼み、以下のように書いてもらった。「たとえあなたが私の父でなくても、どうか私の父だと言って下さい。皆、私が身寄りのない根無し草だと思っているのです。」手紙は実際に彼女の父の許に届き、前述の内容の手紙を読んで彼女が自分の実の娘だということが分かった。父はシュワイカ村に行くと30年以上ぶりの再会を祝った。

兵役の他にも、トルコ人は日々労務や仕事を際限なく課した。彼らはいつも村にやって来て、ラクダの所有者たち（ラクダを使って仕事をする者たち）を連れて行った。これは帝国領内の諸地域にトルコ軍の物資を運ぶためであり、これは報酬のない「強制労働」に等しいものだった。「強制労働」の期間はどこに物資を運ぶかによって決まり、行き先はナーブルスやハリール、イスタンブールなどだった。アブー・アリーは子供の頃、トルコ人たちが家に来てラクダと一緒に父を連れて行った時の様子を覚えている。「父はラクダを持っていて、野菜や石材を運ぶ仕事をしていた。トルコ人たちが来ると、ある時は1週間、ある時は2週間、ラクダと父本人も連れて行った。行く場所がどこかによって期間は違っていたよ。父は長くて大きいビスケットを軍から持って帰ってき

たが、給料は出なかった。奴らは村で誰がラクダを持っているか知っていて連れて行ってたんだ。」

トルコの統治の間、住民の多くが経済的に苦しい状況にあったにもかかわらず、トルコ人たちの軍隊は村民たちの個人財産を奪ったり襲ったりした。「亡くなった祖父は蜂を持っていた〔育てていた〕。奴らは夜やって来て陶器の甕かめを持ち出し、盗んでいったり壊したり中の蜂蜜を取り出したりしていた。ある日、祖父はトルコ軍のコマンダー〔司令官〕の所に行った。こいつは村にいる私のおじタウフィークの部屋を本部にしていたんだ。『私の子供たち6人は軍隊で働いた。この蜂は私のもんで私たちはこれで食ってるんだ』と言った。するとコマンダーは言った。『おおハーヅジよ、落ち着け、落ち着け。今日は俺たちが蜂蜜を食べてやった。明日は別の者がやって来る。そしたら今度食べられるのはお前たち自身さ。』」

村にはいつも「騎馬隊」と呼ばれた軍の部隊が駐留していた。村民たちは騎馬兵たちの命令で馬に餌と水を与えなければならなかった。この頃、村には〔地下水圧で自然に湧き出る〕アルトワ式井戸しかなく、村は水不足に苦しんでいた。ある時、シェイフの1人が水を差し出さなかったために騎馬兵に殺されたという事件が起きた。「ある時、イスマーイール・アル＝ガスーンという井戸に奴らが来た。奴らはシェイフに『馬に水を飲ませるから他の井戸にも連れて行け』と言ったんだ。シェイフが嫌だと言うと、奴らはシェイフを殴って地面に叩きつけ、馬もシェイフを踏みつけて殺してしまった。トルコ人はご満悦だったよ。人の権利を食い潰していたようなもんだからさ。」

イギリス人とトルコ人間の戦争〔第1次世界大戦〕が近づくと、トルコ人たちは戦争準備を始め、塹壕を掘り始めた。彼らはイギリス人の進軍ルート上にある村々を重要拠点として選び出し、その1つだったデイル・ヤーシーン村にも要塞が建設された。彼らは男女問わず村民を徴用し、ブルグル〔挽き割り小麦〕1キロを報酬として1日中働かせた。村民たちは1日の終わりに村長の家

でブルグルを受け取った。塹壕内には大砲が置かれた。ある女性が当時の記憶を語っている。「水牛や牛に乗って大砲が運ばれて来た。大砲はそれぞれ荷車に乗せられていた。要塞はカルニヤ村に向かう西側と村の北側に造られ、仕事の報酬は1日中働いてブルグル1キロだった。おじの妻は要塞造りに行くのに毎日小さい娘も連れて来てたよ。乳を飲ませるためさ。私はその時10歳で、要塞に行くとき〔村民たちが働く傍で〕トルコ人たちがイチジクの蕾を取って塩をつけて食べる姿を見かけたよ。」

準備が整い、戦争が近づいてきた時、トルコ人たちから村から出るという命令が出た。イギリス人たちが村を通過するだろうから、村民たちは自分の命を守れと言うのだった。このことについてあるシェイフは語る。「トルコは村に対してジェニーンに逃げろと言った。なぜジェニーンなんだ!?誰もわからない。奴らは小麦、大麦、馬、毛布が余分にあれば村の中心部に置いて行け、政府が対価を払う、と言ったんだ。村民たちは家を出る所だったので持っているものを競って差し出した。村民たちが持ち物を放り出すと『政府からくれてやるものは何もないさ』と言って私たちを嘲笑ったんだよ。」

村を出ると住民たちはそれぞれ違う方向に別れた。ある者は近くの洞窟に、ある者はエルサレムに行った。ハーツジャ・ジャミーラは言う。「私らはブドウの木のある洞窟に行き、油や小麦や蜂蜜の甕を降ろして洞窟の扉を閉めた。おじのマフムード・サラーフは雄牛を屠ってマンサフに入れ、ブドウの木の下で振る舞ってくれたよ。その後洞窟から出て様子见到シェイフ・ヤーシーン・モスクまで行くと、イギリス人たちが村の西側から入ってトルコ人たちが東側から出て行ったとわかったんだ。」トルコ人たちは食料や武器をたくさん残していた。「村に戻ると、トルコ人たちが残した小麦、ブルグル、武器をたくさん見つけた。この時私は弾丸2箱とライフル2丁を取った。1つはトルコ製の小さいエム・『ルンマーナ』というライフルで、もう1つは『ムラッバス』という長いライフルだった。」

多くの村民の感覚からすれば、トルコ統治下の経済状況は苦しかったとは言え、イギリス人たちやユダヤ人たちと比べて、村民たちの財産や宗教儀礼を保護した唯一の政府はトルコだけだった。「トルコ時代にあった統治 (hukm) の後はもう統治と呼べるものは無くなってしまったよ。昔はどこへ行くにも身分証もパスポートもいらなかった。ラマダーン中、断食しない奴がいればラマダーン明けの祭りの後に30日間キシュラ〔エルサレム旧市街内の刑務所〕に放り込まれた。ラマダーン中はエルサレムの巡回があって、1つの食堂も開けさせなかったし、私たちの子供を惨たらしく殺すことも、私たちを家から追い出すことも、私たちの土地を取ることもなかったんだ。」

村は四方をユダヤ人入植地に囲まれていた。しかし村民によれば、この環境にもかかわらずデイル・ヤーシーン村の土地がユダヤ人側に流れ出すことはなく、入植地が建てられたのはリフタ村、エイン・カレム村、マルハ村の土地だったという。事実、ユダヤ人ブローカーが村民をお金で釣って土地を売らせようとしたことは何度もあった。しかし、実際に起こったことはその逆だった。「ある時、1人のユダヤ人がやって来た。奴はザイダーンの家の者の土地の中に土地を持っていた。そして、建物を建てるために地図を作ろうとしていた。ザイダーンの家の者は自分の土地のうちの20平方メートルの土地を売ろうとしたが、そこには条件があった。奴が自分の土地から2分の1ドゥナム〔約500平方メートル〕を渡すという条件だった。奴の方もこれに納得したからザイダーンの家の者は奴に土地を売ったんだ。」

村と入植地の関係は経済的なものだったが、それにも増して友好的なものだった。村の農産品の多くは入植地で売られ、村から野菜や果物を売りに行っていたのは女性たちだった。ユダヤ人の方は村に石材や建築資材を買いに来た。革命〔註24参照〕が起ると両者間の緊張が高まり、村民とユダヤ人との間の関係が断たれた。およそ6か月間、村と入植地の間での売買がなくなった。ユダヤ人はその間、様子見に徹しつつも通行人への挑発を行い、特に1人

で通りがかる者への仕打ちはひどかった。「ある時、エイン・カレム村の1人がユダヤ人に捕まった。奴らは彼が通るのを邪魔したけど彼は生きていた。それから奴らは通行人を見つけるとそいつを殴り倒すようになった。」また、彼らの土地の近くにあるアラブ人農地の破壊も始めた。ある時、両者間で衝突が起こり、イギリス人の軍が来て多くの村民を逮捕したことがあった。ハーッジ・ハミース・ザイダーンと言う。

ある時、私たちと奴らとの間で大きな争いが起こり、奴らがこっちの農地に入り込んでめちゃくちゃにしたんだ。俺たちが攻撃を仕掛けに行ったら500人とか700人とかで反撃してきて、俺たちを追い出して村に押し返そうとした。村の者は「アッラーフ・アクバル〔アッラーは偉大なり〕、アッラーフ・アクバル」と言い始めたよ。そしたら村の人たちが色々な所から出てきて助けてくれた。それで奴らを奴らの家の中に追いつめ、この時は奴らの腹が膨れるまで攻撃を食らわしてやったよ (akalū waqtha qatle li-shaba'ū)。その後、奴らはイギリス人たちに知らせを送り、イギリス人たちは村を取り囲んで7人ほど捕まえた。捕まったのはジウムア・ムハンマド、ムハンマド・サムール、ムハンマド・ザイダーンたちだった。この時、奴らは捕まえた若者たちをワード・アリーの入り口まで連れて行き、罰として砂袋を運ばせ山に登り降りさせた。それから〔パレスチナ北部の〕アトリート刑務所に連れて行った。ユダヤ人たちとの衝突はもう1度あった。この時はイギリス人が来てデイル・ヤーシーン村やマルハ村やエイン・カレム村の住民を捕まえて、エイン・カレム村の警察署に5時間ほどぶち込んだ。その後で目ぼしい人間だけを拘束していった。

村民たちの語りからは、多くの村民がパレスチナ・アラブ党、特にムフティー〔イギリスからエルサレムの大ムフティーに任命されたハーッジ・ア



ミン・アルフサイニー。註 16 参照] を支持していたことが分かる。ある女性は 8 歳の時、ハーッジ・アミンがリフタ村やその近くの村を訪れた時に歓迎の宴会が開かれたことを覚えている。

ハーッジ・アミンがリフタ村に来た時、村の者は皆彼の歓心を買おうとして集まり、出迎え、見物し、まるでお祭り騒ぎだった。この時は、今も残っているあの学校の傍に絨毯を敷いたんだ。ハーッジ・アミンの写真は村のどの家にも飾られ、いつもこんな歌を歌ったよ。

ハーッジ・アミンよ 皆で出迎え あなたは通り過ぎていった  
彼の傍らの剣は稲妻のように光る  
政府は彼に服従した

彼のため 文書にサインした  
ハーッジ・アミンよ お願いだ どうか留まりたまえ  
あなたは月で我らは星  
政府は彼に服従した

彼のため 支払い額にサインした

革命〔註 24 参照〕が起こった時、デイル・ヤーシーン村は傑出した役割を演じたため、イギリス人たちからの激しい報復対象になった。革命家たちは近くのイスラエル入植地への攻撃を続けた。イギリス人たちは入植地への攻撃には全て早急かつ嚴重に対応し報復を行った。彼らが村に来て若者たちを拷問することもあった。ある女性が言う。

ある時、ジャバアート・シャーウール入植地への攻撃が起きた。その夜、イギリス人たちが村に来て周りを取り囲み、村長の家の男どもを皆捕まえ

てむち打ち刑にしたり殴ったりした。その頃、フォードという名の酷い司令官がいて、奴が村に来た時は1人ずつライフルを投げ捨てないといけなかった。奴らは村の若者シャークル・サーリフ・リドワーンを捕まえ、死の苦しみに喘ぐまで殴った。この時、私のおじシェイフ・マフムード・サラーフが外にいた女性たちを呼んだんだ。私らは軍に立ち向ってシャークルを奴らの手から取り返した。その時フォードはおじのシェイフに助けを求めたけど、おじはフォードに「この血の煮えたぎる怒り (fūra dam), どうしてくれようか。」と言ってやったんだ。若者が1人殺されたと聞いたけど私には何もできなかった。

イギリスの体制の特徴の1つは、恣意性と不正義であった。この時期、武器・弾薬所持に関する多くの法律が制定され、厳しい布告が出された。中には次のような定めがある。「レボルバー（連発拳銃）所持には禁固6年、爆弾所持には禁固12年、弾丸12個の所持につき労役5年、地理情報について軍隊に虚偽の情報を流した容疑には禁固18か月、爆発物所持の容疑には禁固9年、軍からの弾薬購入の企てには禁固5年、こん棒所持には2週間の禁固。」〔*Īsā al-Safri. Falasṭīn al-‘Arabīya bayn al-‘Intidāb wa al-Ṣahyunīya. Yāfā: Maktaba Falasṭīn al-Judīda. 1932. p.10*〕この頃、デイル・ヤーシーン村の多数の若者に対して上記の罪を犯したという中傷が多くなされ、中傷があっただけで6か月～1年半の禁固が言い渡された。刑を受けたのはムハンマド・サーリフ、アリー・ハサン、アフマド・イスマーイールたちだった。

イギリス人たちは村に検問所も置いた。検問所には村の男性全員の名簿があった。毎日4時、全員揃っているかを確認するため村長同席で点呼を取った。その場にはいない者については、村長がその人物の不在理由と居所をイギリス人たちに説明せねばならなかった。この状況が数か月間続いた。ある時は10～15人のイギリス人騎馬隊が来て、村民の1人に命じて全員分のアリーク [‘arīq

馬の餌。「ミフラー mikhla」という小袋に入れ、馬の頭からぶら下げられた (yu'arraq) ためこう呼ばれる] を用意させた。

また、常に巡回と家宅搜索の作戦があった。この間、村民は嫌がらせを受けたり食料を台無しにされることもあった。ある革命家の息子は、彼が10歳の時に家宅搜索に来たイギリス人たちの様子をこう記憶している。「ある時、奴らは父について聞きに来ると、家中あるもの全部持って行って全部一緒くたにして広場の地面に放り出した。米の上に砂糖、その上にレンズ豆、その上に灯油という具合に。またある時は父のことを聞きに来て家の戸棚を床にひっくり返していった。」

村からは多くの革命家が生まれた。例えばアリー・カースィム・ハミーダ、ムハンマド、ザイダーン、シャークル・サーリフ・リドワーン、ムサー・ハサン、ムハンマド・サーリフ、ムハンマド・カースィム・ハミーダらである。彼らは、向かいの山をユダヤ人入植地やイギリス軍軍車への攻撃の出発点や拠点にした。シャマアさんという女性はここで自分の父やおじが行っていたことをこう記憶している。

父はムハンマド・カースィム・ハミーダという革命家だった。おじのアリーも革命家だったよ。ある夜、彼らは村から2キロ南にある「アクラア・ラジャブ」という山に登って、ユダヤ人入植地ベイト・ハーキーリム〔ヘブライ語ではベイト・ハ＝カレム〕を1時間ほど攻撃していた。それから戻って来てライフルを隠し、散り散り分かれていった。北から来る奴らや幹線道路から来る奴らがいた。ある時、父が祖父カースィムの家の庭にライフルを隠したけど、イギリス人たちに見つかったことがあった。この時、父は血だらけで、鼻血をだらだら流し、血まみれのハンカチを体の後ろに隠していた。イギリス人たちが来て「お前はどこにいたんだ」と聞かれると、「ここは私の父の家で、私はずっと父の傍にいた」と答えた。父は自

分の家に戻ると「今夜は村の男たちがたくさん捕まった。村は軍隊でいっぱいだった」と言った。朝、私ら女たちが草刈りに出ると村が囲まれていて奴らが「お前の家〔へ戻れ〕、お前の家〔へ戻れ〕」と言っているのを見つけた。私たちは走りに走って家に戻りこのことを父に伝えたよ。父は弾丸とスィラハラク〔彈薬ベルト〕を全部持ち出して穴の中に隠した。汚い水の溜まった穴だった。その後、飛行機が飛んで来て「外出禁止」と書いたチラシをばらまき始めて家の搜索が次々始まった。

同様に、革命家たちはイギリス人の護送隊やパトロール隊を襲い、特にエルサレム（バカア地区）とヤーファー・ラムラ・リッドをつなぐ鉄道を攻撃していた。ある革命家は言う。

あの頃、デイル・ヤーシーン村から幹線道路に降り、カスタル村に行き、カスタル村とカルニヤ村の間で陣を張ってイギリス人のパトロール隊を攻撃していた。ある時、弾薬と物資を積んだイギリス人の列車がやって来ると知ったんで鉄道に向かった。私たちは列車を壊してやろうと思って、線路と線路の間を拡げる鍵を持っていった。列車は西から来てエルサレムに向かう所だった。バツティール駅で列車を待ち伏せして線路を拡げて電車をひっくり返した。奴らがバツティール駅から知らせを送ったんで、少しすると辺り一帯に飛行機が飛び周り始めた。私たちはエイン・カレム村にあるフルダクの泉に行った。そしたら神のご慈悲さ、ブドウやオリーブの木が私たちを隠してくれた。これがなけりゃ私たちは殺されていたよ。また別で起こった衝突では、ムーサー・ハサンたち大勢の怪我人が出た。この時イギリス人たちは20村ほどを取り囲んで革命家たちの搜索を始めた。この時ハーッジ・ジャーバルは、外出禁止令が出ているのを知らずに畑を耕していた。そしたら奴らはハーッジ・ジャーバルまで撃ちこまれた。た

だ耕していただけたのを。

多くの村民は自分の能力や取りうる手段に応じた形で革命に参加した。例えばアブー・ダルウィーシュ・アッ＝バースイーニー（村の骨接ぎ師）は多くの村を巡り負傷した革命家たちの治療にあたった。彼は次のように言う。

イギリス人たちの時代に起こった革命の時、私は怪我人の治療をしていた。怪我人を村近くの洞窟に移して治療したよ。ある時、村のムーサー・ハサンという若者が怪我をした。かなり重傷だった。体にはたくさん弾丸が入りこみ、彼が回復するまでの50日間、私は屋外（al-khalā）〔フスハーではal-'arā〕でずっと側についていた。またある時は〔革命家の〕リーダーのアブー・シャアバーンの足を治療した。いつも誰かが私を呼びに来て骨折の治療をしたり弾丸を取り除いたりした。ある時、怪我した革命家の治療を終えて屋外から戻ろうとすると、飛行機から攻撃されてロバの下に隠れたこともあった。ロバは死んでしまった（nafaq）〔「死んだ（māt）」と同義だが、動物にしか使わない言葉〕けどお蔭で私は何ともなかった。その後、イギリス人たちが来てエルサレムのアーキラという医師からもらった資格証明書が取り上げられた。そこには「骨接ぎ師の資格あり」と書かれていたんだ。

イギリスがパレスチナ撤退の決定を発表すると、状況はいよいよ決定的になった。ユダヤ人たちからの挑発は激化し、そのため武器が必要な状況になった。村のシェイフたちが話し合い、村全体から代表を2人選んで武器の買い付けのためにエジプトに送ることが決まった。女性たちはこのために宝石を寄付するなどして資金を集めた。買い付け役を買って出たのはムスタファー・ラキーヤ・アブー・イードとムハンマド・アリー・アブー・サラーフだった。

使者たち2人はライフル銃約25丁とブレン〔Bren〕という種類の機関銃2丁、それに弾丸を持ち帰った。その後村ではムハンマド・ザイダーン、アスアド・リドワーン、ハーッジ・ジャーバル、ユースフ・アフマド、ムハンマド・ザハラーン、アフマド・アスアド、フサイン・ザイダーンの7人から成る委員会が作られた。委員会のミッションは、戦闘員をグループに分けて地区ごとに警備させたり夜間の〔侵入者の〕搜索をさせることだった。約40人が武器を取り交代で警備し、午後6時から夜12時までのグループと夜12時から朝6時までのグループができた。夜間搜索の監督に指名されたのはフサイン・ザイダーンで、警備の実施やその他関連する事柄について監督した。日中はずっと、武器携帯が可能な若者全員に対する武器取扱い訓練があった。訓練を担当したのはサラーフ・アブド・ハリリーヤとマフムード・カースィムらイギリス国境部隊の1つ「赤ベルト」で働いた男たちだった。

村の石材工場の警備員とユダヤ人たちとの間では複数に渡る衝突があった。工場の所有者はハーッジ・アスアド・リドワーンで、工場はジャバアート・シャーウールから10メートルの場所にあった。発端は警備員が工場に向かってくる武装した男たちの一団を見つけて銃撃したことで、ユダヤ人の内の1人が負傷し、彼はその後死亡した。約2時間半の間、両者間で銃撃戦が起こり、その後イギリス人たちの軍隊が来て事の顛末を調べたが何の処分もなかった。

その結果、ユダヤ人たちはエルサレムに続く道路を村民たちの目の前で約2か月間閉鎖した。道路が閉鎖された間、村民たちはエルサレムに行くには約10キロの険しい山道を歩かねばならなくなった。「ユダヤ人たちと断交した後は道が全く変わった。村の西側から出て南に進み、エイン・カレム村やマルハ村、カタムーン地区を通してエルサレムに行かなければならず、4時間もかかった。以前の道だと旧市街のハリール門までは5分もかからなかった。しかもハリール門に着いたらユダヤ人地区から奴らが石で襲って来るようになった。」

道路閉鎖の間、軍事車両が来ないよう村の周囲には東側から深さ2メートル

半、幅4メートルの塹壕が掘られ、その後ろにもう1つ見張り用の塹壕が掘られた。この間、ユダヤ人は事態の改善を図ろうとしてデイル・ヤーシーン村のアラブ人住民に対してチラシを撒いた。ある村民はチラシの内容をこう記憶している。「我々は諸君に助けを差し出したい。我々は隣人関係を維持したい。これには条件がある。よそ者を村に入れないでほしい。我々に協力せよ。そうすれば諸君に村の警備を任せ、友好関係を維持しよう。」

村民はこれらの提案を拒否し、武器を使う訓練を続けた。この間、2キロ半先では「カスタル村の戦い」が起こり、実践経験があり訓練も十分に積んだデイル・ヤーシーン村の若者たちが多数これに参加した。これらの若者たちにはアブドゥルアズィーズ・サラーフ、ムハンマド・ウスマーン・サラーフ、ムーサー・ムハンマド・イスマーイール、ジャバル・タウフィーク・ジャーバル、ムーサー・タウフィーク・サラーフ、ムハンマド・アブド・ラシーダ、フサイン・アリーがいた。

戦闘に加わった者の一部は負傷し、ヤーファーで治療を受けた。アーリフ・サラーフ、ムハンマド・アブド・ラシーダ、フサイン・アリーたちだった。無事だった若者たちは殉教者アブドゥルカーディル・アル＝フサイニー〔本稿183(294)頁参照〕の葬儀に参列した。そのため村には16～20歳ほどの若い警備員たちしか残っておらず、彼らは武器の使い方について十分な訓練を受けていなかった。アブドゥルカーディル・アル＝フサイニーが殉教した時、戦闘員たちは旗やバナーを持ってカスタル村、カルニヤ村、デイル・ヤーシーン村を巡り、愛国的なスローガンとユダヤ人たちへの報復を繰り返して訴えた。村民の中にはデイル・ヤーシーン村が虐殺の舞台に選ばれたのはこの時の出来事に関係していると信じている者もいる。

「[4月9日、虐殺の起こった当日] 奴らは前方から、北方から、遺跡の方から、溪谷からと次々村に入って来た。」ユダヤ人たちは村民の誰にも気付かれぬうちに奇襲する計画だった。アブー・ヤーシーン氏は、この日、兄と自分の身

に起こった事件を次のように語る。「私にはムーサーという兄がいた。兄はカスタル村で戦って帰って来たばかりで疲れて少し眠っていた。その後、村の東側からユダヤ人たちが入って来たという声が聞こえた。兄は起きたけれど、半分寝たままのような状態で奴らを銃撃していた。ユダヤ人たちは後ろから兄を捕まえて気絶するまで殴った。奴らは兄を殺すこともできただろうけど、この時は殺さなかった。村の包囲が完全に終わるまで村の誰にも気付かれなくなかったのさ。」

夜の12時、這いつくばって村の方に向かって来るユダヤ人たちの集団を見つけた警備員たちが彼らを殺害した。その後、ユダヤ人たちは幹線道路とワード地区の間にある一帯を包囲した。これは村にとってはおよそ第一防衛線にあたる場所だった。午前2時、ユダヤ人たちが攻撃を始めた。村の東側から大砲と戦車で攻撃し、住民の皆殺しが起こった。人が中にあるのにそのまま爆破された家もあった。

当時13歳だったアブー・ヤーシーンは攻撃のあった夜のことをこう記憶している。

この日のことを忘れられる者はいまい。この時、父はすでに亡くなっていて、私は13歳で兄弟姉妹たちや母と一緒に眠っていた。四方八方から銃と大砲の音が聞こえて私たちは目を覚ました。兄は何が起こっているか見ようとして外に出たが、急いで戻って来て兄弟姉妹たちを連れて逃げた。私は道中ずっと小さい妹をおんぶしていたのを覚えているよ。銃弾が雨みたいに降ってきて頭のすぐ上を飛んでいった。エイン・カレム村に続く道まで連れて来てくれたけどそこから母と兄は村に戻ったよ。この時ハヤー・アル＝バルブシーという女の先生と一緒にいた。先生は立ち止まって言った。「みなさん、私は何て恥知らずなんでしょう。私の務めは、少なくとも村に戻って怪我人を助けることです。」そして彼女は私たちと



別れて村に戻って行った。

ライフルの他、村にはブレンという種類の銃が2丁あり、村の作戦拠点で保管されていた。1丁は幹線道路に面したダハダーハ地区の向かいにあるサラーフの家に置かれ、サラーフ・ムハンマド・ハミードが管理していた。もう1丁は村の入り口付近で保管され、サーリフ・アブド・ハリールが管理していた。

村に近づいて来たユダヤ人たちは、村民が掘った塹壕に辿り着き、木で橋を渡してその上に戦車を通した。しかし、1台目の戦車が攻撃を受けてしまったため故障して動かず、逆さまにひっくり返った。戦車は村につながる一本道を塞ぎ、ユダヤ人側の機器や他の戦車の行く手を阻んだ。襲撃者たちは歩いて村に入らねばならず、当然ながら彼らの士気は著しく下がった。アラブ人戦闘員は山頂におり、その下にユダヤ人たちがいるという形になった。「まるで草を食むヤギみたいなもんだ。ブレンを使えば奴らは何十人も死んだ。全部で約600人が死んだよ。奴らから攻撃して来て私たちは山の上に集まっていたからね。」

ある戦闘員はこの戦闘の様子をこう語る。

夜中2時に始まって朝6時まで熾烈な戦いが続いたよ。村民は昼12時頃までは持ち堪えていたんだ。その後、弾薬が減っていき簡素な弾丸だけになった。目の前で村民が大勢死んでいったよ。私の父と兄も。だけど、この時はまだ気迫ある戦いが続いていた。アリー・ハサン・ザイダーンやハサン・アリー・ザイダーン、それから父の奥さん〔義母〕のファーティマ・サムール、私の母方おばヒルワ・ザイダーン、その夫アーイシュ・ハリール、その子供〔いとこ〕ムハンマド・アーイシュ・ハリールとムハンマド・ハリール・ハミースも目の前で殺された。母方おばは戦闘員たちと

一緒に怪我人を救助していて、自分の夫が殺されると「ルルル…！」という甲高い声をあげて〔ザガーリードと呼ばれる発声。通常は婚礼など祝いで発せられるがここでは家族の死に際して発せられている〕、『おお、祖国に身を捧げた若者よ！間もなく助けが来る！』と言った。その後彼女の息子も殉教し、彼女はまた「ルルル…！」と声をあげ『おお、祖国に身を捧げた若者よ！』と言った。その後彼女自身も殉教した。

村内での戦闘が激しさを増すと、多くのユダヤ人たちが逃げようとする女性や子供たちの目の前でエイン・カレム村に続く一本道を封鎖しようと試みたが、村の戦闘員たちがこれを阻止した。村民たちが女性や子供たちを守るための作戦を行い、彼らを避難させたためだった。弾薬が少なくなると戦闘員たちは徐々に撤退し始め、戦闘は「家から家へ」という段階に移り、ユダヤ人たちは若者、子供、女性を集め、殺害した。

奴らは私の兄弟サリーム、ジャミール・イーサー、イーサー・カアバル、いとこジャーバル、アブドゥルアズィーズ・サムールの息子を殺した。おばが言うには、自分の息子は彼女にしがみついで『母さん、助けてくれ、死にたくない』と言ったそうだ。彼はまだ若かった。その少し後、銃声が聞こえて彼らは撃たれた。奴らはサーリヒーヤという女性とその息子も殺した。奴らはザハラーンの家を35人を壁の傍に立たせ1度に撃ち殺し、ムスタファー・アリーの家の20人も殺した。彼らはフェアード・ハリール・ジャーバルも彼の母親の腕の中で殺した。息子をこんな風に殺された母親は今も精神を病んでいるよ。

その後、家の戸が叩かれ、家から追い出され、若者や10歳以上の子供が殺され、女性は捕虜になった。まだ銃弾の飛び交う中、彼らはアラブ人女性捕虜

にユダヤ人の遺体を運び出させた。アラブ人女性にこの仕事をさせたのは、アラブ人戦闘員たちに攻撃を思いとどまらせるためであり、仮に銃撃が続いたとしても怪我を負うのはアラブ人女性で済むからだった。

ユダヤ人は騙しの手口を使っていた。ユダヤ人たちは怪しまれずに戦闘員たちのいる場所に忍び込むために村民の家宅捜索中に見つけたアラブ衣装とクフィーヤ〔頭にかぶる男性用スカーフ。ハッタと同義〕を身に纏って変装した。怪我人の救助だけでなく戦闘そのものにも参加した数少ない女性の1人、ハーτζジャ・ジャミーラは言う。「私とヒルワ・ザイダーン、ハヤー先生は戦闘員たちと一緒にいた。私たちは死んだ村民たちから顔を見ずに武器を取った。本当に、もしパレスチナ全体が私たちと同じように持ち堪えていたならここまでの大敗をくらうこともなかっただろうに。」

午後3時を過ぎると弾薬も底をつき、9人の戦闘員だけを残して皆撤退した。この戦闘員たちはムハンマド・ザイダーン・アリー・サラーフ、アブドゥルカーディル・ザイダーン、ムハンマド・ユースフ・アフマド・アリヤー、アリー・ユースフ・アフマド・アリヤー、ハリール・ムハンマド・イスマーイール、ムハンマド・ウスマーン・サラーフ、ジャミーール・アフマド・サラーフ、シャークル・ムハンマド・ムスタファー・イード、ムハンマド・アリー・フサイン・ハーミドである。戦闘員のうち捕虜となったのはアリー・フサイン、ムハンマド・イスマーイール・サムール、アブドゥッラー・アブドゥルマジード・サムール、ムハンマド・アル＝ティブジー、サリーム・ジャーバル、イーサー・ムハンマド・イードである。彼らのその後の運命は現在もわからない。若者の戦闘員のうち殉教者はムハンマド・アーイシュ・ハリール、ハサン・アリー・ザイダーン、アリー・ハサン・ザイダーン、マフムード・アリー・ムスタファー、ムハンマド・アブドゥルアズィーズ、アリー・ムハンマド・ザハラーン、ムハンマド・ムーサー・ザハラーン、ジャバル・タウフィーク・ジャーバル、サリーム・ムハンマド・ジャーバル、ムハンマド・イスマーイー

ル・アティーヤ、マフムード・ムハンマド・イスマーイール・アティーヤである。

ユダヤ人たちは住居への侵入作戦を続け、家の中の人々を追い出し、女性たちからは宝石や現金を無理やり奪った。「金やブレスレット、ネックレス、イヤリングを全部持って行った。イヤリングを引っ張り、片耳がちぎれてもお構いなしだった。」その後、朝10時から夕方4時まで捕虜をジャルジャール地区のムスタファー・アリー・ザイダーンの家の傍に集めた。ある女性は言う。

私の姉の赤ん坊は生後40日だった。この子が泣き出した時、ユダヤ人の1人がやって来てこの子を捕まえ、地面に叩きつけた。怖い思いをしたせいで赤ん坊の体には湿疹ができ、良くなるまで4カ月も〔エジプトの〕アメリカン病院にいた。それから私たちが身に着けていた金を外させ、イヤリングも耳から引っ張って取っていった。それで「お前らをテルアビブに連れて行くぞ」、「お前らをクフタ〔ミンチ肉の煮込み団子料理〕にしてやる」、「お前ら死に<sup>たい</sup>体の<sup>が</sup>餓鬼<sup>き</sup>を皆殺ししてやる」、「ターバン王（Abū Laffa）〔当時のヨルダン国王アブドゥッラー〕の所に行け。奴に食わせてもらえ」「出ていけ犬め」「俺らの金は俺らの所へ、ユダヤ人の金はユダヤ人の所へ」と罵った。

その後、女性捕虜たちをトラックに乗せ、複数のユダヤ人居住地を連れ周した。ユダヤ人の群集の前を通る時は勝利の祝砲を放った。エルサレム〔旧市街〕近くのムスラーラ地区で女性たちを降ろし「さあ、ターバン王の所に行け、アブドゥッラー王の所に行け!」と言った。トラックに乗せられた女性の1人ファヒーマ・アリー・ムスタファー・ザイダーンはこの日のことについてこう語る。

私たちは皆寝ていて父の声で起きた。父は怪我をしていて、できるだけ早く家を出ると言った。兄のマフムードがどんな状況か見に行っただけど、急いで戻ってきて「今はユダヤ人たちが辺りいっぱいにいるから外に出られないよ」と言ったよ。その後、私たちは皆納戸に隠れた。そしたらおじとその妻、おじの娘の夫と小さい子供たちもこっちに来た。私たちは皆恐怖で死にそうだったよ。おじの娘の夫は怪我して血を流していた。そこに3時間ぐらいいたよ。私たちの状況を知るのは神だけだった。それから日が昇って戸が叩かれたけど私たちは応えなかった。奴らは地雷でドアを爆破し、家の中を探して納戸まで来たんだ。私たちは1人ずつ家の外に出された。奴らはおじの娘の夫を撃ち、彼の小さい娘が泣くとその娘を上から撃った。それから兄のマフムードを呼んで私たちの目の前で撃った。母は気が狂ったように兄に覆いかぶさったんだ。母は妹ハドラを抱いていた。この子はまだ乳飲み子だった。だけど奴らは兄に覆いかぶさる母も上から撃ったんで私たちは皆泣き叫んだ。すると奴らは「泣き止まないなら皆撃ち殺すぞ」と言った。それから「一列に並べ」と言い、私たちを撃って出ていった。私は手を服の上に置いてみると血まみれだった。それから誰が生き残ったかのかを見に外に出たよ。おじもその妻も子供たちも死んでいたけど、4歳の妹スマイヤは元気だった。弟ムハンマドも生きていた。生き残った妹と弟と一緒に家の中に入ってそこに2時間くらい座ってたよ。それから窓を開けて外の様子を見ると、妹ハドラが顔をあげて母の胸から乳を飲もうとしているのが見えたんだ。ハドラを連れて来ようとして外に出ると、ユダヤ人の1人に見つかって「すぐに家から出て来い」と言われ、私も妹も弟も外に出された。乳を飲もうとするハドラを抱こうとしたけどできなかった。それから私は他の女性たちと一緒に村を出て歩かされた。少しすると若者1人とシェイフ1人がユダヤ人に見張られながら両手を上にあげて〔降伏を示すポーズで〕歩いているのを見つけた。彼らはこっち

まで来ると撃たれてしまった。私たちと一緒にいた女性の中に撃たれた若者の母親がいた。彼女はユダヤ人たちに飛びかかって殴ったよ。すると彼らのうちの1人が彼女をナイフで何度も刺した。それから私たちをトラックに乗せ、ユダヤ人地区をいくつも周り、侮辱の言葉を浴びせハリール門に連れて行き、そこで降ろした。それから私たちを国際〔赤十字〕委員会に引き渡すと、委員会は私たちをエルサレムにあるイタリアン病院に連れて行った。そしたらそこで妹ハドラに会えたんだよ。ハドラをこの病院に連れて来てくれたのも赤十字だった。2日後には父にも会えた。私たちと同じ病院で治療を受けていたんだ。私たちは病院を出るとヒンド・アル＝フサイニー〔本稿183(294)頁参照〕の世話になった。

アラブ高等機構 (Hay'a al-'Arabīya al-'Ulyā) が捕虜たちの身元を引き受け、委員会内に属する社会問題部局の保護下においた。遺体は「ジョーザ」という放棄された井戸に投げ捨てられたと言われた。村を訪れた国際赤十字〔委員会のパレスチナ事務所〕代表は、「深い井戸や洞窟には150の遺体が投げ込まれていたが、その場所は交戦中だったため近づくことができなかった。彼はまた、路上にも50の死体が散らばっていたと話した。」〔新聞『防衛〔al-Difa'〕』1948年4月12日。p.1, 第6コラム〕

男性捕虜については、車にくくりつけられたままデイル・ヤーシーン村から「マハニー・イーファー」まで何度も引っ張られた者たちがおり、彼らは皆その後殺された。その後、村に残っていた人々を連れて来るため、エルサレムのアラブ高等委員会 (al-Lajna al-'Arabīya fi al-Quds) がエイン・カレム村や近くの村々まで車を出した。皆アラブ高等委員会の事務所で落ち合い、身内の安否を尋ね合った。「私と小さい息子はエイン・カレム村に逃げ、それからワラジャ村に行った。皆は車を用意してくれ、アラブ高等委員会の事務所まで送ってくれた。事務所で彼らと落ち合ったけど皆泣いていた。父を殺された者もい

たし、兄弟を殺された者もいた。私たちの家族は皆死んでしまった。アリー・サイダンの家は兄とその子供たち、彼の母、祖父、姉妹が死んでしまった。」他の女性も言う。

母は村を出るために逃げていたけど撃たれてしまった。銃弾は右から入って反対側から出ていったよ。母は「逃げなさい、逃げなさい、ユダヤ人たちに追いつかれてしまう」と叫んだ。母は逃げ、エイン・カレム村に着くと道端に倒れこみ、父と父方おじが来て「おおうム・ファフリー、何があったんだ？」と聞いた。母は彼らに「死にたい」と言っていたよ。父たちは母を抱えてベイト・サファーファー村の病院に連れて行った。そしたら母には手術が必要だということになって、今度は〔エルサレムの〕フランス病院に行った。そしたら「ユダヤ人たちが来る」という声が聞こえて、病院への銃撃が始まった。私たちはベッドの下に隠れたよ。その後、奴らが病院を占領すると私たちに食料をくれなかった。その後、アラブ人たちが〔エルサレム旧市街内の〕ユダヤ人地区を占拠したので、アラブ人とユダヤ人の間で捕虜が交換されることになった。私たちも彼らと交換されることになって、目隠しされて〔旧市街内の〕オーストリアン・ホスピスに送られた。

捕虜交換に応じたり、村からの逃亡を許したのにも理由がある。村民を追い出し、彼らが目撃したことを他の者に語ることで地域全体の恐怖を煽り、結果的にアラブ人全員を土地や故郷から追い出そうと目論んでいたのだった。ある村民が母から聞いた話はまさにこの点を示唆している。「母は妹と弟2人を連れて逃げた。1人は1歳、もう1人は2歳だった。母は父方おばと彼女の小さい子供たちも一緒だった。ユダヤ人たちが逃げる途中の母たちを見つけ、弟もおばの子供たちも皆殺そうとした。母とおばは『持っているお金や<sup>きん</sup>金は全部あ

げるから私たちの子供たちを殺さないで』と命乞いをした。ユダヤ人たちはこれを無視して子供たちを全員殺し、母たちに『さあ、行け。会ったもの皆に今見たことを伝えろ』と言ったんだ。』

以下は、1948年4月9日に起きた虐殺で亡くなった殉教者たちの名前と年齢のリストである。我々はデイル・ヤーシーン村の村民たちの口〔聞き取り〕から情報を集めた。ここに挙がった人物たちを調査し、確認を取るまでには大変な作業を要したが、これまで作られた同種のリストの中で一番正確なものと躊躇いなく言えるものになった。〔性別は訳者による追記〕

表1 死亡した村民のリスト

通し番号	名前	年齢 (推定)	性別
1	イスマイル・シャーケル・ムスタファー	1	男
2	アフマド・フサイン・ムハンマド・アティーヤ	4	男
3	イスマイル・アル=ハーッジ・ハリール	40	男
4	アフマド・ハサン・アフマド・ジャーバル	45	男
5	アスアド・リドワーン	75	男
6	イスマール・アティーヤ	95	男
7	アーミナ・フサイン	80	女
8	アーミナ・アリー・ムスタファー		女
9	アーミナ・アル=クープリー		女
10	バースイマ・アスアド・リドワーン	25	女
11	ジャーバル・タウフィーク・ジャーバル・ジャーバル	27	男
12	ジャミール・イーサー・イード	30	男
13	ジャーバル・ムスタファー・ジャーバル	75	男
14	フサニーヤ・アティーヤ		女
15	ヒルワ・ザイダーン	50	女
16	ハサン・アリー・ザイダーン		男
17	ハサン・ヤアクブ・ムハンマド・アリー・ファルハーン		男
18	フサイン・イスマイル・ムハンマド・サムール		男
19	ハリール・ムスタファー・ジャーバル	35	男
20	ハドラ・アル=ベイトゥーニーヤ (ムスタファー・アリー・ザイダーンの妻)	60	女
21	ハヤー・アル=バルビースイー		女
22	サーミヤ・アリー・ムスタファー	17	女



「虐殺」の物語の奥行き

通し番号	名前	年齢 (推定)	性別
23	サリーム・ムハンマド・イスマエール	25	男
24	スアード・イスマエール・アティーヤ	21	女
25	サイド・ムハンマド・イスマエール・アティーヤ	7	男
26	サミーハ・アフマド・ザイダーン	7	女
27	サイド・ムハンマド・サイド	15	男
28	サミーフ・アフマド・ザハラーン	9	男
29	サムール・ハリール・イスマエール	11	男
30	サイド・ムーサー・ザハラーン		男
31	シャフィーク・ムーサー・ムスタファー		男
32	シャフィーク・シャークル・ムスタファー		男
33	シャフィーカ・ムーサー・ムスタファー		女
34	スプハ・リドワーン	75	女
35	サフィーヤ・ムハンマド・イード (シェイフ)	70	女
36	サーリヒーヤ・ムハンマド・イード	20	女
37	ザリーファ・ムハンマド・アリー・ハリール	16	女
38	イーサー・アフマド・ユースフ	50	男
39	アブドゥルラフマン・フサイン・ハーミド	52	男
40	(ハーッジ) アイシュ・ハリール	70	男
41	アズィーザ・アリー・ムスタファー	17	女
42	アブドゥッラー・アブドゥルマジード・サンムール	23	男
43	アリー・ハサン・アリー・ザイダーン	30	男
44	アリー・ムハンマド・ザハラーン	30	男
45	アリー・フサイン・アリー	35	男
46	アリー・アル=ハーッジ・ハリール	30	男
47	アイダ・アリー・ムスタファー (ウムリー)	40	女
48	アウニー・イスマイル・アティーヤ	8	男
49	アリー・イード・アルラフマン・ハーミド	10	男
50	イーサー・ムハンマド・イード	15	男
51	ウマル・アフマド・ザハラーン		男
52	ウムラーン・ムハンマド・イスマエール・アティーヤ		男
53	アズィーザ・マスラフ		女
54	イード・アルハリリー		男
55	アリー・フサイン・ハサン・マスラフ		男
56	ユスラー・ムーサー・ムスタファー		女
57	ユースフ・アフマド・アリヤー		男
58	ファァティマ・サムール	45	女

通し番号	名前	年齢 (推定)	性別
59	ファージェイマ・ムハンマド・イード (マーリヒーヤ)	90	女
60	ファージェイマ・ジュムア・ザハラーン	6	女
61	ファージェイマ・イスマーイール・アティーヤ		女
62	ファトヒー・ジュムア・ザハラーン	2	男
63	ファアード・アッシュェイフ・ハリール	12	男
64	ファークリス・ダウィーク	30	男
65	ファディーヤ・イスマーイール・サムール (カリーユエティーヤ)		女
66	ファトヒーヤ・ジュムア・ザハラーン		女
67	マフムード・アリー・ムスタファー	17	男
68	マフムード・ムハンマド・ジュウダ	25	男
69	マーズィン・アフマド・リドワーン	5	男
70	ムスタファー・アリー・ザイダーン	9	男
71	ムハンマド・アルハーッジ・アーイシュ	25	男
72	ムハンマド・マフムード・イスマーイール・サムール (ティブジー)	35	男
73	ムハンマド・アリー・ハリール	25	男
74	ムハンマド・イスマーイール・アティーヤ	50	男
75	ムハンマド・マフムード・ザハラーン	14	男
76	ムハンマド・ムーサー・ザハラーン	17	男
77	マリヤム・ムハンマド・アティーヤ	10	女
78	ムーサー・ムハンマド・イスマーイール・アティーヤ	13	男
79	マフムード・ムハンマド・イスマーイール・アティーヤ	15	男
80	ムスタファー・マフムード・ムスタファー・ザイダーン	11	男
81	ムハンマド・フサイン・ムハンマド・アティーヤ	2	男
82	ムハンマド・ハリール・ジャーバル	5	男
83	ムハンマド・アリー・ムスタファー	50	男
84	ムハンマド・アリー・マスリフ	55	男
85	ムハンマド・ジュウダ・ハミダーン	66	男
86	マフムード・ムスタファー・ジャーバル	50	男
87	マンスール・アブドゥルアズィーズ・サムール	27	男
88	ムハンマド・アリー・ザハラーン		男
89	ムハンマド・ムーサー・ムスタファー		男
90	ミヤッサル・ムーサー・ムスタファー		女
91	ムハンマド・サイード・ジャーバル		男
92	ムーサー・イスマーイール・サムール		男

「虐殺」の物語の奥行き

通し番号	名前	年齢 (推定)	性別
93	ムハンマド・アリー・ムスタファー・ザイダーン		男
94	(ハッジヤ) ナジュマ・イスマーイール	100	女
95	ナズミー・アフマド・ザハラーン	2	男
96	ルカイヤ・アラヤーン (アフマド・ザハラーン) (スーパーニーヤ)	30	女
97	リドワーン・アスアド・リドワーン	14	男
98	ザイナブ・ジュムア・ザハラーン	4	女
99	ザイナブ・ムハンマド・アティーヤ	15	女
100	リブヒー・ムハンマド・イスマーイール・アティーヤ	16	男
101	ラスミーヤ・ムーサー・ザハラーン		女
102	ザイナブ・ムハンマド・ムーサー・ザハラーン (マーリヒーヤ)		女
103	タマーム・ムハンマド・アリー・ハサン	17	女
104	タウフィーク・ジャバル	40	男
105	ワトファー・アブド・ムハンマド・アリー・ハサン		女
106	サーラ・アル=クブリーヤ (ムハンマド・ザイナブ・アティーヤの妻)	40	女
107	ムハンマド・ザハラーン	65	男

加えて、以下は怪我の治療のため公立病院に入院した12人の名前である。

表2 負傷した村民のリスト

名前	年齢	負傷の種類	性別
ターハ・ハリール・イスマーイール	2	弾丸で腕を負傷	男
ムハンマド・アリー・ムスタファー	7	弾丸で足を負傷	男
ハドラ・アリー・ムスタファー	4	爆弾の破片で頭と胸を負傷	女
ムハンマド・マフムード・ムスタファー	11	弾丸で太ももを負傷	男
ファヒーマ・アリー・ムスタファー	13	弾丸で胸を負傷	女
ニアマ・ムハンマド・アリー・ハサン	17	弾丸で太ももを負傷	女
サミール・ハリール	8	弾丸で右手を負傷。母と兄弟も同様に負傷。父と一番上の兄ファワードは殺された。ファワードは小さな子供たちの前で母の胸の上で惨殺された。	男
マリヤム・ザハラーン	3	弾丸で足を負傷	女
ザイナブ・ムハンマド・イスマーイール・アティーヤ	18	体の複数の部分を負傷。父が殺され、兄も彼女の目で惨殺された。	女

ザイナブ・ムハンマド・イスマーイー ル・アティーヤの赤ん坊	生後 50日	前頭部に傷	女
アリー・ムスタファー・アリー	38	肩を負傷	男
アフマド・アブド・アリー	22	爆弾の破片で体の複数の部分を 負傷	男

戦闘が起こった時、村は孤立状態だった。デイル・ヤーシーン村に近いエイン・カレム村にはアラブ諸国からの軍隊の兵士 600 人がいて、生き延びた村民たちが助けを懇願したにもかかわらず、アラブ兵たちは村への突入命令がないという理由で助けを求める声に応じなかった。村民の心に刻まれた苦い感情と当惑は今日まで続いている。あるシェイフはこう語る。

ユダヤ人に関してなら、何があろうと奴らは敵だとはっきり言える。だが責めは私たちの隣人〔のアラブ人たち〕にもある。あんたを惨たらしく殺したのは隣人たちの他にない。〔例えば〕私の所に盗人が来た。ユダヤ人のことさ。奴は私の家に盗みに入った。あんたは眠っていたわけでもなく、あんたの所には 600 人の兵士がいた。なのにあんたは「あり得ない〔bātal〕！」とは言わなかったんだ〔何の行動も起こさなかった〕。私たちが惨たらしく殺されているのにあいつらは逃げ出して誰一人助けに来なかった。全員追い出すためにユダヤ人があいつらに金を払ってるという話まで飛び交ったよ。

その後、デイル・ヤーシーン村の住民への寄付が続けられ、ヒンド・アル＝フサイニーが小さい孤児たちを皆引き取った。孤児は男女約 55 人に上り、これらの子供たちの年齢は 5 歳を超えなかった。孤児のためにエルサレム旧市街のスーク・アル＝フスルにある古い眼科病院の向かいに家を借りた。この時、爆撃が激しくなり、旧市街のアスバート門〔エルサレム旧市街東側の壁に位置

する。別名「ライオン門」] 近くにあるシオン修道院に移った。移動した当日の夜、以前借りていた家に爆弾が落ちて屋根と壁が崩れた。停戦後、ヒンド・アル＝フサイニーは孤児たちを自分の祖父の家に移し、アンワル・アル＝ハティーブ、マアムニーヤ学校校長バスマ・ファーリス、ヒンド・アル＝フサイニーの3人から成る委員会を作った。目的は、孤児たちの住居確保と生活支援のための寄付を募ることだった。年齢の高い子供たちは外の学校に送り、「アラブの子供たちの家 (Dār Ṭīf al-'Arabī)」を設立して、小学校1年生向けのクラスを開いた。

デイル・ヤーシーン村の村民のために寄付を出したのは〔エルサレム旧市街南の糞門すぐに位置する〕スイルワーン村だった。スイルワーン村の住民たちは、生き残ったデイル・ヤーシーン村民たちを連れて来るために車を出し、受け入れ家族を割り当て、食料や水、避難所を用意した。

スイルワーン村は私たちのために寄付してくれて、デイル・ヤーシーン村民たちは友人だと言ってくれたよ。シャーヒーンの家で口利きで有名な人がいたんだ。彼は生き残りの内の72人を自分で引き取って残りを別の家々に振り分けたんだ。彼は必要な服や布を全部揃えてくれた。よく覚えているよ。必要品を揃えるためにムハンマド・アブー・ザミーラという織物商人を旧市街から連れて来たんだ。私たちは彼の所に35日間いたよ。その後、ユダヤ人たちがスイルワーン村を攻撃し始め、私も子供たちも一緒にまた逃げた。奴らはアラブ人を見つけるとアブー・ディース村に連れて行った。この時、スイルワーン村では2人のデイル・ヤーシーン村民が殺された。私たちはアブー・ディースに2年いてからスイルワーン村に戻り、そこに13年いた後、アイザリーヤ村に住んだ。

ウンム・ナーセル・アル＝ハーラはデイル・ヤーシーン村を出た後、アリー

ハー〔エリコ〕のアカバ・ジャバル難民キャンプに避難した。彼女は言う。

村を出た後、アカバ・ジャバルのキャンプに住んだ。生活は全く変わってしまったよ。村での豊かで満たされた暮らしが無くなって道端の石ころになった。上にも下にも何もない。私は女性たちと座って一緒にこう嘆いたよ。

ブドウとイチジクの土地を去った私たち

アリーハーに来て小麦を乞う

ブドウとアーモンドの土地を去った私たち

アリーハーに来て水を乞う

新聞を持ってきておくれ ペンを持ってきておくれ

誰がデイル・ヤーシーンを乗っ取ったのか見せておくれ

新聞を持ってきておくれ インクをおくれ

誰がデイル・ヤーシーンを支配したのか見せておくれ

その後、周りの状況が少し良くなったのでアブー・ディース村に移り住んだよ。

パレスチナ民衆は世界中に離散している。それと同じように、デイル・ヤーシーン村の村民たちも離散した。現在、離散した村民のうち最も大きなグループは、〔ヨルダンの〕アンマーン、アッ＝ザルカー、〔パレスチナの〕アブー・ディース、スィルワーン、アル＝ビーラ、バツティーン、アリーハー、アナーター、サルフィート、アル＝アイザリーヤ、バイト・ハニーナーにいる。

今日でも村民間の関係は強く、ヨルダン川西岸地区では特に強い。ハムーラ間では常に連絡を取り合い、祝い事や儀礼や葬儀などの機会に皆で集まっている。

る。村民たちはまだ同じハムーラ内での婚姻を最も望ましいものと考えている。その次に望ましいのが同じ村の出身者同士での婚姻で、そのため「村の息子は自分の息子」という表現もある。村民たちは機会がある度に村のあった場所を訪れている。親たちは自分の子供たちに、村の様子やその痕跡、村内のハムーラ関係、家や畑の様子を語る。ある村民は言う。「いつも村を訪れる時は小さい子供も一緒に連れてくるんだ。自分の村、祖父たちの村を知るためだよ。私たちは子供たちに、ここが私たちの家だ、ここによく集まっていた、ここで婚礼の踊りをした、ここでは・・・と話すんだ。」

我々は村のシェイフの1人アブー・アーイシュの案内でデイル・ヤーシーン村を訪れた。村の中を周る間、彼はたびたび村を訪れているにもかかわらず、村の中の家や通りの様子を見て驚きを隠さず言った。「忌まわしきデイル・ヤーシーンよ、これがお前の姿だなんて私は信じない。婚礼の行進をしたのはどこだ、1時間も座っていたんだ、私たちが歩き回っていた村はどこなんだ。」

私たちは村の道を進み、家や木々を通過する。ディーワーン（マダーファ〔ゲストハウス〕のこと）に着き、アブー・アーイシュは周りの広場を見て言う。「どうなっているんだ、私たちがいた時は村全体はもっと大きかったはずだ！これがあの村なのか!? 村はすっかり変わり、石までも真っ黒だ！」

- 1 Kanā'ana, Sharīf, wa Nihād Zaytāwī. 1987. *Dayr Yāsīn: Al-Qurā al-Filasṭīniya al-Mudammara, Raqam Arb'ā*. (*Dayr Yasin: The Destroyed Palestinian Villages, No.4.*) Bīr Zayt: Markaz al-Wathā'iq wa al-Abḥāth al-Mujtama' al-Filasṭīnī.
- 2 同プロジェクト全般については拙稿参照。金城美幸、「破壊されたパレスチナ人村落史の構築——対抗言説としてのオーラルヒストリー」『日本中東学会年報』第30巻1号, pp.129-146. 2014年. 同プロジェクトの取り上げる22村については巻末の地図1参照。
- 3 イスラエルの公文書調査に依拠するベニー・モリスは377村、イギリス委任統治政府調査局発表の『パレスチナ地名辞典索引』（1945年）を基にしたワリード・ハーリデーは418村、パレスチナ地理学者サルマーン・アブー・スィッタは530村と

推計している。

- 4 そのうちの例外的研究は以下。Nazzal, Nafez. 1978. *The Palestinian Exodus from Galilee 1948*. Beirut: Institute for Palestine Studies; Sayigh Rosemary. 1979. *Palestinians: From Peasants to Revolutionaries*. London: Zed Press.
- 5 Morris, Benny. 1987. *The Birth of the Palestinian Refugee Problem*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 6 金城美幸. 「国家の起源にどう向き合うか——「新しい歴史家」とパレスチナ難民問題」白杵陽監修, 赤尾光春・早尾貴紀共編『シオニズムの解剖学——現代ユダヤ世界におけるディアスポラとイスラエルの相克』人文書院, 2011年, pp.144-164.
- 7 Morris, Benny. 2004. *The Birth of the Palestinian Refugee Problem Revisited*. Cambridge: Cambridge University Press, 2004.
- 8 Davis, Rochelle. 2011. *Palestinian Village Histories: Geographies of the Displaced*. California: Stanford University Press.
- 9 「記憶されるパレスチナ」<http://www.palestineremembered.com/index.html> (2016年9月30日閲覧)
- 10 「ナクバ・アーカイヴ」<http://nakba-archive.org/> (2016年9月30日閲覧)
- 11 「ビルゼイト大学パレスチナ・アーカイヴ・プロジェクト」<http://ialiis.birzeit.edu/en/node/487> (2016年9月30日閲覧)
- 12 Ha-Irgūn ha-Tsvāi ha-Leumi b-Erets Yisrā'el(ヘブライ語で「イスラエルの地における民族軍事組織」)の略称。1931年に設立された修正主義政党系地下軍事組織で委任統治政府は「テロ組織」に指定していた。1948年5月末にイスラエル国防軍に編入。
- 13 Loḥamē Ḥerūt Yisrā'el(ヘブライ語で「イスラエル自由戦士たち」)の略称。1940年、イルグンから分離。組織の規模はイルグンに比べ小さく、数百人程度。
- 14 Saleh Abd al-Jawad. 2007. "Zionist Massacres: the Creation of the Palestinian Refugee Problem in the 1948 War." In *Israel and the Palestinian Refugees*. eds. Eyal Benvenisti, Chaim Gans, and Sari Hanafi, 59-127. Berlin, Heidelberg and New York: Springer.
- 15 Khalidi, Walid. 1998. "Selected Documents on the 1948 Palestinian War". *Journal of Palestine Studies*. 27 (3) (Spring): 60-105.(引用は p. 78) ハーディーの古くからの主張に対し、ベニー・モリスはダレット計画策定へのシオニスト指導部の関与を裏付ける史料がないとの理由で、同計画は前線軍人たちの現場判断だと結論付けた。対して、複数の公的史料から当時のシオニスト指導部の意思決定の構造を読み解き、同



- 計画へのシオニスト指導部の関与を論証したのがイラン・パベである。Pappe, Ilan. 2006. *The Ethnic Cleansing of Palestine*. Oxford: Oneworld Publications Limited. 森まり子は、一次史料の読解からこの2つの立場についての再検討を試みている。森まり子. 2014. 「建国期のイスラエル内閣閣議議事録 史料紹介と予備的考察（一）——『人民執行部 議事録一九四八年四月一八日～五月一三日』に見る統治権力確立過程とアラブ問題」東京大学東洋文化研究所紀要. pp. 124-204; 森まり子. 2015. 「建国期のイスラエル内閣閣議議事録 史料紹介と予備的考察（二）——『暫定政府会合議事録』第1巻（1948年5月16日～5月30日）に見るイスラエル国家の性格及び諸制度をめぐる論争とアラブ問題」東京大学東洋文化研究所紀要. pp. 207-300; 森まり子. 2016. 「建国期のイスラエル内閣閣議議事録 史料紹介と予備的考察（三）——『暫定政府会合議事録』第2～3巻（1948年6月1日～6月16日）に見る第一次停戦受諾とイスラエル国境アラブ難民帰還問題をめぐる論議」東京大学東洋文化研究所紀要. pp. 186-394.
- 16 1895年～1974年。エルサレム名望家フサイニー家に生まれ、委任統治政府により「エルサレムの大ムフティー」と「最高ムスリム評議会」議長に任命され、1930年代半ばまでイギリスとの交渉の道を探るも、1936年の大革命（註24参照）ではゼネストと対英闘争を主導し、1937年に委任統治政府によってパレスチナを追放された。その後、ナチス・ドイツに接近した事実ゆえ、近年のイスラエルの政治言説ではパレスチナ民族運動を反ユダヤ主義と同一視する短絡的な議論も登場している。
- 17 邦訳はジャック・ド・レニエ「デイル・ヤーシーン 一九四八年四月一〇日」（黒田美千代訳）板垣雄三編『アラブの解放』平凡社, pp. 51-59. 1974年.
- 18 Dinur, Ben-Zion. (Ha-Ôreḡ ha-Rāši [The Primary Editor]). 1959-1976. *Sēfer Toldôt ha-Haganāh [The Book of the Haganah]*. Vol. 1-3. Tēl Abīḡ: Mīsrād ha-Bīṭāḡhōn Hōsā'āh le-'Ôr "Ma'arākōḡ. (引用は p. 1548)
- 19 Ganzaḡ ha-Medīnāh, Medīnāḡ Yisrā'el [Israel State Archives]. 1979. *T'ūdōt Mđīniyūt ve Diplomatīyot: Deṡember 1947 - May 1948 [Political and Diplomatic Document: December 1947-May 1948]*. Yerūšālam: Ganzaḡ ha-Medīnāh. (p. 625-6 参照)
- 20 Milshstein, Uri. 2007. *'Alīlat Dām ve-Deir Yassin: Ha-Sēfer Ha-šāḡōr (Blood Libel at Deir Yassin: The Black Paper)*. Tēl Abīḡ: Ha-Midrāshāh ha-Le'ūmīḡ be-Šrīdūt. ミルシュテインがデイル・ヤーシーン事件に「血の中傷」という語を当てているのは興味深い。血の中傷は、古来よりキリスト教世界において、ベサハ（過越しの祭り）に際してユダヤ教徒がキリスト教徒の子供を殺害してその血でパンを焼くという伝説が

無根拠に語られ、ユダヤ教徒への暴力を煽ってきた歴史的問題を指す言葉である。つまり、ミルシュテインは「虐殺」事件を批判するパレスチナ人およびシオニスト主流派の主張を（近代の人種の問題である反ユダヤ主義に先立つ）キリスト教世界のユダヤ人憎悪との類推で批判するのである。この、「血の中傷」との類推は、ベサハの季節であるユダヤ歴ニサン月（西暦3～4月ごろ）というユダヤ歴の時間軸の中での語りであるに対し、パレスチナ人たちは事件の起こった1948年4月9日が「金曜日（ヤウム・アル=ジュムア）」、すなわち集団礼拝が行われる神聖な日だった点を強調し、イスラーム的時間軸で語ることも興味深い対照点である。

- 21 Cohen, Abner. 1965. *Arab Border Villages in Israel*. Manchester: Manchester University Press; Asad, Talal. 1975. "Anthropological Texts and Ideological Problems: An Analysis of Cohen on Arab Villages in Israel." *Economy and Society*, 4:3, pp. 251-282.
- 22 外部研究者と村民自身にとっての「ハムーラ」の意味内容の違いを強調するアサドに対して、日本での研究では村民らが生活経験の中で用いる用語に着目するものがある。イスラエル北部のメルキト派カトリックの研究を行う菅瀬は、「ハムーラ」は外部研究者による分析用語として村民の生活経験の中で知覚される父系集団は住民たちの用いる「dār(家)」という語を使う（菅瀬晶子『イスラエルのアラブ人キリスト教徒——その社会とアイデンティティ』、溪水社、2009年）。また錦田も、ヨルダン在住のパレスチナ難民の研究では同様の問題関心から「ハムーラ」ではなく難民たちの用いる「ashīra(氏族)」という語を用いた（錦田愛子『ディアスポラのパレスチナ人——「故郷（ワタン）」とナショナル・アイデンティティ』有信堂、2010年）。
- 23 デイル・ヤーシーン村周辺には、ギブアート・シャウール（1906年設立）、ルーメイマー（リフタ村の一部に作られた入植地、1921年）、ミシケノート・シェアナニーム（1860年設立）、ベイト・ハ=カレム（1922年設立）、ヤフェー・ノフ（1929年設立）の5つの入植地があった。
- 24 1936年4月、パレスチナ・アラブ人の主要6政党から成る「アラブ高等委員会」がユダヤ移民停止を求め6か月間のゼネストを呼びかけたことに始まる。イギリス当局は「大反乱 The Great Revolt」と呼ぶが、村民らは「大革命 al-Thawra」と呼ぶ。イギリスはピール調査委員会を派遣し、翌年の報告書ではユダヤ国家・アラブ国家・イギリスの統治地域から成るパレスチナ分割が提案された。これに反発したパレスチナ・アラブ人たちが不服従行動や武装活動を展開し、委任統治政府の大弾圧を受けた。



出典：原文付録のカマル・アブドゥル・ファッターハ作成の地図を基に訳者作成  
地図1 「破壊されたパレスチナ村落記録プロジェクト」の対象村

The Depth of the Massacre Story: A Commentary and a Japanese Translation of *Dayr Yasin*. (Series of the Destroyed Palestinian Villages, No. 4). Authored by Sharif Kana'ana and Nihad Zeitawi.

by Miyuki KINJO

This paper presents a commentary and a Japanese translation of *Deir Yassin: The Destroyed Palestinian Villages, No. 4* (1987. Kana'ana, Sharif, and Nihad Zeitawi. Birzeit: Center for Research and Documentation of Palestinian Society.). The original book is written in Modern Standard Arabic (its descriptive part) and in the village dialect (citations from villagers' speeches). It is one of the publications from a research project conducted from 1986 to 1998 at Birzeit University, located in the West Bank of the occupied Palestinian territories.

This research project aimed to collect and record Palestinian refugees' oral narratives of their native villages that were destroyed in 1948 because of the establishment of the State of Israel. The book is composed of the following four chapters: (1) The popular history of the village; (2) The clans and families; (3) The village in the 1940s; and (4) The politics, the escape, and the exodus. This project preceded a new wave of historical accounts in Palestinian refugee communities of their original village, and more than 120 similar books have been published since then, recording their homeland based on the former villagers' narratives. It is noteworthy that these books based on oral history began to be written after the Palestinian diaspora leaders were defeated in Beirut (1982).

Many Israeli and Palestinian researchers have argued over the question of why Palestinian Arabs became refugees in 1948. As Israel has ruled most of the area in the region, the historiographies in Israel have dominated the Palestinian historical narrative. Especially after the 1980s, when Israeli historians started to publish their research on the cause of the refugee problem based on the then

newly declassified state archives, the “positivist” historiographies gained a great influence over the historical dispute as a whole. In this renewed debate, the Palestinian oral history was sidelined again and was regarded as a distorted narrative.

This translated text is dedicated to the village of Deir Yassin, which will always be linked with the massacre that took place in 1948. Although Deir Yassin is the village that has most often been referred to in the historical dispute, refugees’ memory of the village reveals the rich layers of folklore that once existed there. The villagers’ narratives show us how much the destruction of their homeland means to them, a point that has long been dismissed in the traditional historical dispute.